Ｖ　そ　の　他

大阪感染症情報解析委員会　「今週のトピックス」

毎週火曜日に、その前の１週間に府内保健所に報告があった全数把握感染症および、小児科定点把握疾患と眼科定点疾患の数を集計し、水曜日に開催される大阪感染症情報解析委員会において府内における感染症の流行状況を検討し、「今週のトピックス」を決定している。この情報は、大阪府感染症情報センターのホームページ（http://iph.pref.osaka.jp）を通じて広く府民に還元した。

2022 年　小児科・眼科定点把握感染症の報告数上位５疾患とトピックス

週	1位		2位		3位		4位		5位		ＴＯＰＩＣＳ
1	感染性胃腸炎	5.66	RSウイルス感染症	0.31	A群溶連菌咽頭炎	0.27	突発性発しん	0.24	咽頭結膜熱	0.22	インフルエンザは少ない状態が続いている
2	感染性胃腸炎	7.35	A群溶連菌咽頭炎	0.32	RSウイルス感染症	0.25	手足口病	0.25	突発性発しん	0.24	感染性胃腸炎　増加
3	感染性胃腸炎	7.51	RSウイルス感染症	0.29	A群溶連菌咽頭炎	0.28	突発性発しん	0.23	手足口病	0.15	感染性胃腸炎　増加続く
4	感染性胃腸炎	5.63	RSウイルス感染症	0.37	A群溶連菌咽頭炎	0.26	突発性発しん	0.15	流行性角結膜炎	0.13	RSウイルス感染症　増加の兆し
5	感染性胃腸炎	4.07	RSウイルス感染症	0.25	A群溶連菌咽頭炎	0.22	突発性発しん	0.16	咽頭結膜熱	0.12	感染性胃腸炎　減少続く
6	感染性胃腸炎	2.63	A群溶連菌咽頭炎	0.18	突発性発しん	0.18	咽頭結膜熱	0.13	RSウイルス感染症	0.09	感染性胃腸炎　更に減少
7	感染性胃腸炎	2.59	突発性発しん	0.22	A群溶連菌咽頭炎	0.13	RSウイルス感染症	0.11	咽頭結膜熱	0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向
8	感染性胃腸炎	2.43	A群溶連菌咽頭炎	0.17	RSウイルス感染症	0.16	突発性発しん	0.09	咽頭結膜熱	0.07	小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向続く
9	感染性胃腸炎	2.52	A群溶連菌咽頭炎	0.26	突発性発しん	0.13	咽頭結膜熱	0.11	RSウイルス感染症	0.09	小児科・眼科定点疾患の報告数 増加
10	感染性胃腸炎	2.38	突発性発しん	0.18	A群溶連菌咽頭炎	0.11	咽頭結膜熱	0.11	RSウイルス感染症	0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 減少
11	感染性胃腸炎	2.19	突発性発しん	0.24	A群溶連菌咽頭炎	0.13	咽頭結膜熱	0.11	RSウイルス感染症	0.10	感染性胃腸炎 減少
12	感染性胃腸炎	1.74	突発性発しん	0.23	A群溶連菌咽頭炎	0.15	流行性角結膜炎	0.08	咽頭結膜熱	0.06	小児科・眼科定点疾患の報告数 大きく減少
13	感染性胃腸炎	1.82	突発性発しん	0.28	A群溶連菌咽頭炎	0.27	咽頭結膜熱	0.10	RSウイルス感染症	0.09	小児科・眼科定点疾患の報告数 少ない状況続く
14	感染性胃腸炎	1.87	突発性発しん	0.30	A群溶連菌咽頭炎	0.27	咽頭結膜熱	0.08	水痘	0.06	小児科定点・眼科定点疾患報告数　ほぼ横ばい
15	感染性胃腸炎	2.43	突発性発しん	0.28	A群溶連菌咽頭炎	0.26	RSウイルス感染症	0.14	咽頭結膜熱	0.10	感染性胃腸炎 増加
16	感染性胃腸炎	2.85	突発性発しん	0.42	A群溶連菌咽頭炎	0.31	RSウイルス感染症	0.25	咽頭結膜熱	0.18	感染性胃腸炎 さらに増加
17	感染性胃腸炎	2.76	突発性発しん	0.35	RSウイルス感染症	0.23	A群溶連菌咽頭炎	0.21	咽頭結膜熱	0.17	咽頭結膜熱　増加
18	感染性胃腸炎	2.76	突発性発しん	0.38	A群溶連菌咽頭炎	0.20	咽頭結膜熱	0.19	流行性角結膜炎	0.16	
19	感染性胃腸炎	3.86	突発性発しん	0.36	咽頭結膜熱	0.35	A群溶連菌咽頭炎	0.32	RSウイルス感染症	0.17	感染性胃腸炎 増加
20	感染性胃腸炎	4.50	A群溶連菌咽頭炎	0.40	咽頭結膜熱	0.37	突発性発しん	0.36	RSウイルス感染症	0.25	感染性胃腸炎　増加つづく
21	感染性胃腸炎	4.98	咽頭結膜熱	0.64	RSウイルス感染症	0.36	A群溶連菌咽頭炎	0.30	突発性発しん	0.30	咽頭結膜熱　増加
22	感染性胃腸炎	5.27	咽頭結膜熱	0.54	A群溶連菌咽頭炎	0.50	突発性発しん	0.44	RSウイルス感染症	0.43	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加
23	感染性胃腸炎	6.14	咽頭結膜熱	0.76	RSウイルス感染症	0.49	A群溶連菌咽頭炎	0.36	突発性発しん	0.32	感染性胃腸炎　増加つづく
24	感染性胃腸炎	6.40	RSウイルス感染症	0.88	咽頭結膜熱	0.82	A群溶連菌咽頭炎	0.49	突発性発しん	0.30	RSウイルス感染症　さらに増加
25	感染性胃腸炎	5.60	RSウイルス感染症	1.35	咽頭結膜熱	0.70	A群溶連菌咽頭炎	0.39	突発性発しん	0.30	RSウイルス感染症　増加続く
26	感染性胃腸炎	5.21	RSウイルス感染症	2.67	咽頭結膜熱	0.63	手足口病	0.30	A群溶連菌咽頭炎	0.29	RSウイルス感染症　急増
27	感染性胃腸炎	5.22	RSウイルス感染症	4.33	手足口病	0.54	A群溶連菌咽頭炎	0.53	咽頭結膜熱	0.53	RSウイルス感染症　増加継続
28	RSウイルス感染症	6.49	感染性胃腸炎	4.26	手足口病	0.48	咽頭結膜熱	0.38	突発性発しん	0.33	RSウイルス感染症　過去最高の報告数
29	RSウイルス感染症	7.23	感染性胃腸炎	3.21	手足口病	0.47	咽頭結膜熱	0.32	突発性発しん	0.32	RSウイルス感染症　前週に引き続き最高報告数を更新
30	RSウイルス感染症	6.39	感染性胃腸炎	2.86	手足口病	0.68	咽頭結膜熱	0.36	流行性角結膜炎	0.29	RSウイルス感染症　やや減少
31	RSウイルス感染症	5.97	感染性胃腸炎	2.24	手足口病	0.66	突発性発しん	0.25	A群溶連菌咽頭炎	0.24	RSウイルス感染症の減少つづく
32	RSウイルス感染症	3.51	感染性胃腸炎	1.38	手足口病	0.59	ヘルパンギーナ	0.22	A群溶連菌咽頭炎	0.20	RSウイルス感染症 さらに減少
33	RSウイルス感染症	2.68	感染性胃腸炎	1.44	手足口病	0.78	ヘルパンギーナ	0.21	突発性発しん	0.15	手足口病　増加
34	RSウイルス感染症	2.29	感染性胃腸炎	1.88	手足口病	1.57	ヘルパンギーナ	0.42	流行性角結膜炎	0.27	手足口病・ヘルパンギーナ 増加
35	RSウイルス感染症	2.13	感染性胃腸炎	2.13	手足口病	1.81	ヘルパンギーナ	0.47	A群溶連菌咽頭炎	0.25	手足口病・ヘルパンギーナ 増加続く
36	RSウイルス感染症	2.43	手足口病	2.31	感染性胃腸炎	2.22	ヘルパンギーナ	0.60	突発性発しん	0.30	手足口病・ヘルパンギーナ 増加継続
37	手足口病	2.23	RSウイルス感染症	2.16	感染性胃腸炎	1.81	ヘルパンギーナ	0.55	A群溶連菌咽頭炎	0.30	手足口病・ヘルパンギーナ 今後の動向に注意が必要
38	手足口病	1.89	感染性胃腸炎	1.73	RSウイルス感染症	1.03	ヘルパンギーナ	0.43	A群溶連菌咽頭炎	0.33	RSウイルス感染症　減少
39	手足口病	2.08	感染性胃腸炎	1.80	RSウイルス感染症	0.83	ヘルパンギーナ	0.55	A群溶連菌咽頭炎	0.36	手足口病・ヘルパンギーナ　再び増加
40	手足口病	2.05	感染性胃腸炎	1.92	RSウイルス感染症	0.70	ヘルパンギーナ	0.47	A群溶連菌咽頭炎	0.43	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加
41	手足口病	1.91	感染性胃腸炎	1.66	A群溶連菌咽頭炎	0.56	RSウイルス感染症	0.55	ヘルパンギーナ	0.37	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加続く
42	感染性胃腸炎	2.04	手足口病	1.71	A群溶連菌咽頭炎	0.60	ヘルパンギーナ	0.55	RSウイルス感染症	0.39	ヘルパンギーナ　増加
43	感染性胃腸炎	1.98	手足口病	1.28	A群溶連菌咽頭炎	0.60	ヘルパンギーナ	0.47	RSウイルス感染症	0.28	インフルエンザ　増加
44	感染性胃腸炎	2.15	手足口病	1.24	A群溶連菌咽頭炎	0.54	ヘルパンギーナ	0.46	突発性発しん	0.29	
45	感染性胃腸炎	2.32	手足口病	1.09	A群溶連菌咽頭炎	0.47	ヘルパンギーナ	0.41	RSウイルス感染症	0.28	インフルエンザ　増加続く
46	感染性胃腸炎	2.91	手足口病	0.96	ヘルパンギーナ	0.43	A群溶連菌咽頭炎	0.42	突発性発しん	0.24	インフルエンザ　今後の動向に注意
47	感染性胃腸炎	2.99	手足口病	0.87	A群溶連菌咽頭炎	0.45	ヘルパンギーナ	0.37	突発性発しん	0.24	インフルエンザ　ほぼ横ばい
48	感染性胃腸炎	3.32	手足口病	0.84	ヘルパンギーナ	0.41	A群溶連菌咽頭炎	0.35	突発性発しん	0.27	感染性胃腸炎　増加
49	感染性胃腸炎	3.69	手足口病	0.92	A群溶連菌咽頭炎	0.42	ヘルパンギーナ	0.41	突発性発しん	0.26	感染性胃腸炎　さらに増加
50	感染性胃腸炎	4.14	手足口病	0.62	A群溶連菌咽頭炎	0.38	ヘルパンギーナ	0.33	突発性発しん	0.19	感染性胃腸炎とインフルエンザ 増加続く
51	感染性胃腸炎	4.82	手足口病	0.44	A群溶連菌咽頭炎	0.34	ヘルパンギーナ	0.27	突発性発しん	0.19	インフルエンザ　流行期入り
52	感染性胃腸炎	3.15	A群溶連菌咽頭炎	0.25	手足口病	0.24	突発性発しん	0.17	RSウイルス感染症	0.14	2023年第1週との合併

注1：疾患名は小児科定点・眼科定点の対象疾患です。注2：週遅れデータは含まれていません。
注3：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はA群溶連菌咽頭炎と表示しています。

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第1週（1月3日～1月9日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～　手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉･密集･密接の回避が重要

定点把握感染症

「インフルエンザは少ない状態が続いている」

第1週は年始のため医療機関の診療実日数の減少を考慮する必要がある。2022年第1週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,399例であり、前週比14.4%増であった。
定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.66、0.31、0.27、0.24、0.22である。
感染性胃腸炎は前週比15%増の1,116例で、南河内9.69、大阪市西部9.20、中河内7.10、大阪市北部6.57、北河内6.19であった。
RSウイルス感染症は前週と増減なしの61例で、大阪市北部1.36、南河内・大阪市東部0.50である。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比125%増の54例で、中河内0.85、大阪市南部0.42、北河内･南河内0.38であった。
咽頭結膜熱は前週比72%増の43例で、大阪市西部0.60、泉州0.45、南河内0.31である。
インフルエンザは4例、定点あたり報告数は0.01と少ない状態が続いている。

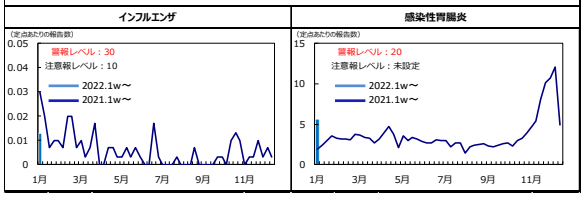


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第1週1月3日～1月9日）

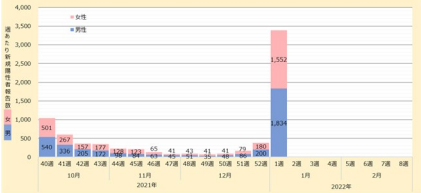
第1週の順位	第52週の順位	感染症	2022年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第1週の定点あたり報告数	2022年第1週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.66	15%増	1.93	１歳_21%
2	3	RSウイルス感染症	0.31	0%増	0.06	１歳未満_34%
3	6	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.27	125%増	0.38	３歳_26%
4	4	突発性発しん	0.24	41%増	0.28	１歳_54%
5	5	咽頭結膜熱	0.22	72%増	0.21	１歳_40%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	300%増	0.03	10-14歳(2例)_50%

第1週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第1週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は3,390名であり、前週より892%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（黄）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日（多くは５～6日）であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避など新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第1週1月3日～1月9日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数府内累積
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1				1					1
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1			1						1
	侵襲性肺炎球菌感染症	1				1					1
	梅毒	5				1				4	5
	百日咳	1								1	1
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	3,390	2020年1月以降累計　207,307								

結核（2021年11月分）	結核　新登録患者数：81名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　1,065名、内　肺･喀痰塗抹陽性　412名）

（2022年1月11日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第2週（1月10日～1月16日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加」

第2週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,724例であり、前週比23.2%増であった。
定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症･手足口病、突発性発しんの順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.35、0.32、0.25、0.25、0.24である。
感染性胃腸炎は前週比30%増の1,447例で、大阪市南部10.58、南河内10.44、泉州9.65、大阪市西部8.40、中河内8.00であった。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%増の64例で、中河内0.90、大阪市南部0.68、南河内0.44である。
RSウイルス感染症は20%減の49例で、大阪市北部0.93、大阪市東部0.86、大阪市西部0.60であった。
手足口病は29%増の49例で、三島0.69、中河内0.55、泉州0.45である。
インフルエンザは5例、定点あたり報告数は0.02と少ない状態が続いている。

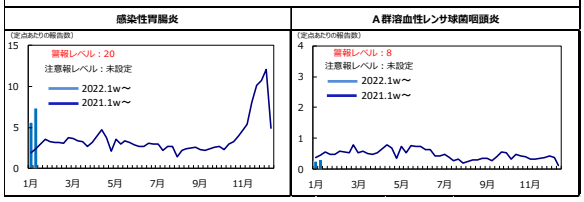


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第2週1月10日～1月16日）

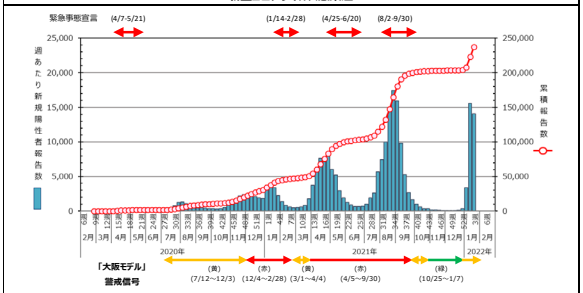
第2週の順位	第1週の順位	感染症	2022年第2週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第2週の定点あたり報告数	2022年第2週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	7.35	30%増	2.34	２歳_19%
2	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.32	19%増	0.45	５歳_16%
3	2	RSウイルス感染症	0.25	20%減	0.17	１歳_33%
3	6	手足口病	0.25	29%増	0.01	１歳_29%
5	4	突発性発しん	0.24	0%増	0.31	１歳_44%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.02	25%増	0.02	１歳未満，２歳，５歳，８歳，15-19歳,_20%

第2週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第2週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は15,553名であり、前週より459%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（黄）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫･エアロゾル･接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避など新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第2週1月10日～1月16日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数府内累積
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2					1			1	6
	後天性免疫不全症候群	1								1	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	1			1						2
	梅毒	1	1								7
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	15,553	2020年1月以降累計　222,860								

結核（2021年11月分）	結核　新登録患者数：81名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　1,065名、内　肺･喀痰塗抹陽性　412名）

（2022年1月18日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第3週（1月17日～1月23日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加続く」

第3週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,726例であり、前週より2例増とほぼ横ばいであった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.51、0.29、0.28、0.23、0.15である。

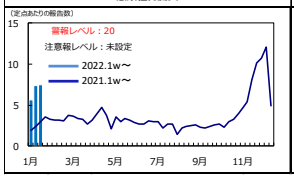
感染性胃腸炎は前週比2%増の1,479例で、南河内14.69、泉州10.65、大阪市北部10.07、北河内8.69、堺市8.21であった。

RSウイルス感染症は18%増の58例で、南河内0.88、北河内0.50、堺市0.37である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は13%減の56例で、泉州0.55、中河内0.50、大阪市東部0.43であった。

手足口病は41%減の29例で、堺市0.37、三島・南河内0.31である。

感染性胃腸炎



RSウイルス感染症

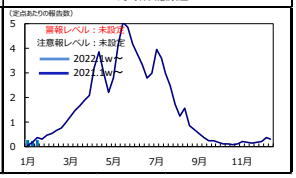


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第3週1月17日～1月23日）

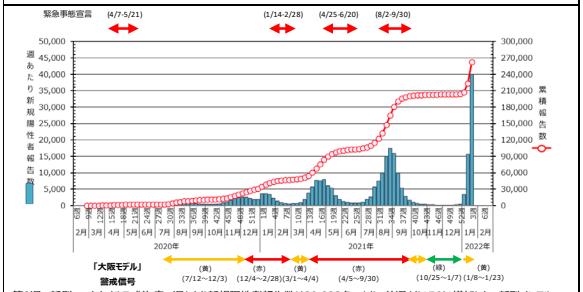
第3週の順位	第2週の順位	感染症	2022年第3週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第3週の定点あたり報告数	2022年第3週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	7.51	2%増	2.95	2歳_20%
2	3	RSウイルス感染症	0.29	18%増	0.39	2歳_31%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.28	13%減	0.55	3歳_18%
4	5	突発性発しん	0.23	4%減	0.39	1歳_41%
5	3	手足口病	0.15	41%減	0.04	2歳_41%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.02	40%増	0.01	20歳以上(4例)_57%

第3週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第3週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は39,823名であり、前週より156%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第3週1月17日～1月23日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1					1				5
５類感染症	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1	4
	水痘（入院例）	1								1	1
	梅毒	5					1			4	32
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	39,823	2020年1月以降累計　262,683								
結核（2021年11月分）	結核　新登録患者数：81名（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　1,065名、内　肺・喀痰塗抹陽性　412名）										

（2022年1月25日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第4週（1月24日～1月30日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～　手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉・密集・密接の回避が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　増加の兆し」

第４週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,340例であり、前週比22%減であった。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、流行性角結膜炎の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.63、0.37、0.26、0.15、0.13である。

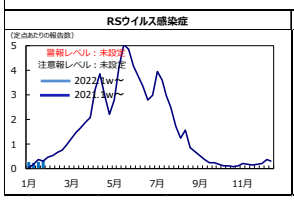
感染性胃腸炎は前週比25%減の1,109例で、南河内9.31、泉州8.30、堺市6.58、中河内6.00、大阪市北部5.86であった。

RSウイルス感染症は24%増の72例で、南河内1.19、大阪市北部1.00、大阪市南部0.53である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の51例で、大阪市南部0.79、泉州0.70、北河内0.31であった。

流行性角結膜炎は75%増の7例で、泉州・大阪市東部0.33、大阪市南部0.25である。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

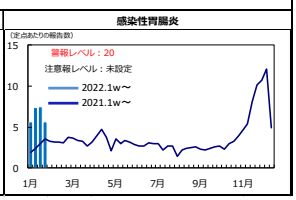


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第4週1月24日～1月30日）

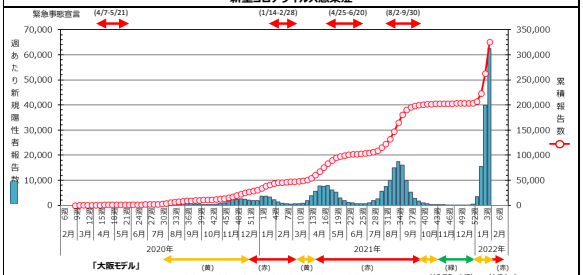
第4週の順位	第3週の順位	感染症	2022年第4週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第4週の定点あたり報告数	2022年第4週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.63	25%減	3.57	2歳_17%
2	2	RSウイルス感染症	0.37	24%増	0.32	1歳_42%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.26	9%減	0.48	10-14歳_20%
4	4	突発性発しん	0.15	35%減	0.38	1歳_57%
5	8	流行性角結膜炎	0.13	75%増	0.17	20歳以上_100%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	43%減	0.01	20歳以上(4例)_100%

第4週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第4週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は62,431名であり、前週より57%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第4週1月24日～1月30日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1						1			8
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1							1	10
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	1								2
	侵襲性肺炎球菌感染症	1			1						6
	梅毒	11	1	1				1		8	66
	百日咳	1								1	4
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	62,431	2020年1月以降累計　325,114								
結核（2021年11月分）	結核　新登録患者数：81名（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　1,065名、内　肺・喀痰塗抹陽性　412名）										

（2022年2月1日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第5週（1月31日～2月6日）

今週のコメント

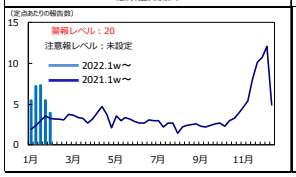
～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　減少続く」

第5週 の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は 984例であり、前週比 26.6%減であった。
報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 4.07、0.25、0.22、0.16、0.12である。
感染性胃腸炎は前週比28減の801例で、南河内7.06、中河内5.30、泉州5.20、北河内4.08、大阪市北部4.07であった。
RSウイルス感染症は32%減の49例で、南河内0.94、大阪市南部0.74、大阪市北部0.43である。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%減の44例で、中河内・泉州0.55、三島0.38であった。
咽頭結膜熱は33%増の24例で、大阪市北部0.36、泉州0.25、北河内0.19である。

感染性胃腸炎



ＲＳウイルス感染症

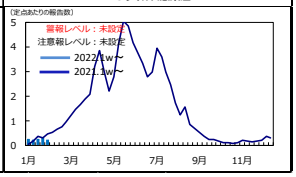


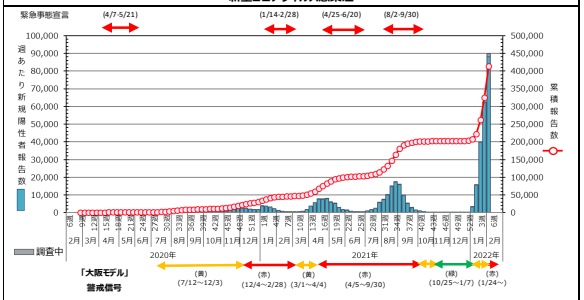
表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第5週1月31日～2月6日）

第5週の順位	第4週の順位	感染症	2022年第5週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第5週の定点あたり報告数	2022年第5週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.07	28%減	3.31	１歳_15%
2	2	RSウイルス感染症	0.25	32%減	0.46	１歳未満_27%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.22	14%減	0.49	20歳以上_20%
4	4	突発性発しん	0.16	3%増	0.40	１歳_48%
5	7	咽頭結膜熱	0.12	33%増	0.27	１歳_46%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.02	25%増	0.01	20歳以上(2例)_40%

第5週のコメント
～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第5週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は88,093名であり、前週より41%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第5週1月31日～2月6日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数府内累積
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2					1			1	10
５類感染症	侵襲性肺炎球菌感染症	2								2	9
	梅毒	7	1						1	5	75
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	88,093	2020年1月以降累計　413,207								
結核（2021年12月分）	結核　新登録患者数：104名（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,178名、内　肺・喀痰塗抹陽性　449名）										

（2022年2月8日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第6週（2月7日～2月13日）

今週のコメント

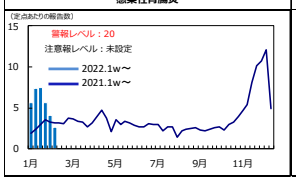
～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　更に減少」

第6週 の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は 648例であり、前週比34.1%減であった。
報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎・突発性発しん、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 2.63、0.18、0.18、0.13、0.09である。
感染性胃腸炎は前週比35%減の519例で、南河内3.94、中河内3.75、三島3.19、泉州2.85、堺市2.79であった。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%減の35例で、泉州0.50、中河内0.40、大阪市南部0.26である。
咽頭結膜熱は8%増の26例で、大阪市北部0.57、大阪市東部0.21、豊能0.17であった。
RSウイルス感染症は63%減の18例で、南河内0.25、北河内0.19、堺市0.16である。
新型コロナウイルス感染症の蔓延に対する休園・休校により、その他の感染症の発生が抑制されている可能性がある。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

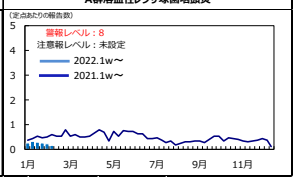


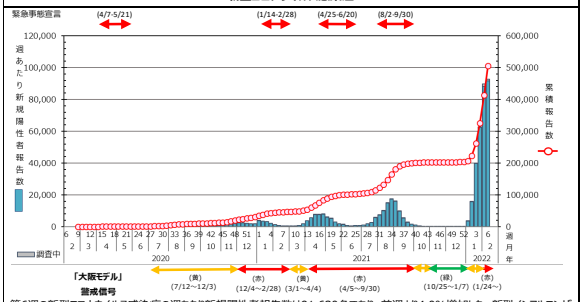
表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第6週2月7日～2月13日）

第6週の順位	第5週の順位	感染症	2022年第6週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第6週の定点あたり報告数	2022年第6週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.63	35%減	3.14	２歳_18%
2	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.18	20%減	0.59	４歳５歳10-14歳_17%
2	4	突発性発しん	0.18	13%増	0.34	１歳_60%
4	5	咽頭結膜熱	0.13	8%増	0.15	１歳_50%
5	2	RSウイルス感染症	0.09	63%減	0.54	１歳未満_44%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	20%減	0.01	10-14歳(2例)_50%

第6週のコメント
～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第6週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は91,630名であり、前週より4.0%増加した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第6週2月7日～2月13日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1	1
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	6
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1	1								1
	梅毒	5			1		1			3	89
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	91,630	2020年1月以降累計　504,832								
結核（2021年12月分）	結核　新登録患者数：104名（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,178名、内　肺・喀痰塗抹陽性　449名）										

（2022年2月15日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第7週（2月14日～2月20日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向」

第7週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は637例であり、 前週比1.7%減であった。先週に引き続き1,000例未満で少ない状況である。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.59、0.22、0.13、0.11、0.08であった。

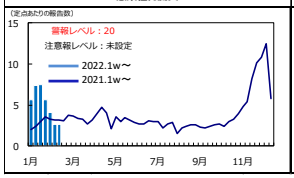
感染性胃腸炎は前週比2%減の511例で、中河内4.00、南河内3.44、大阪市南部3.37、泉州3.00、北河内2.88である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は26%減の26例で、泉州0.55、中河内0.25、大阪市南部0.16であった。

RSウイルス感染症は17%増の21例で、大阪市北部0.57、南河内0.31、大阪市南部0.16である。

咽頭結膜熱は42%減の15例で、大阪市北部0.43、大阪市西部0.30、泉州0.10であった。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

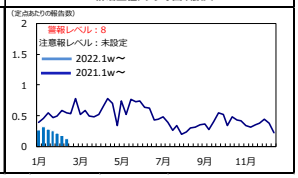


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第7週2月14日～2月20日）

第7週の順位	第6週の順位	感染症	2022年第7週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第7週の定点あたり報告数	2022年第7週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.59	2%減	3.20	2歳_17%
2	2	突発性発しん	0.22	26%増	0.32	1歳_39%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.13	26%減	0.55	4歳,8歳,10-14歳_15%
4	5	RSウイルス感染症	0.11	17%増	0.66	1歳_43%
5	4	咽頭結膜熱	0.08	42%減	0.13	2歳_20%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.00	100%減	0.02	

第7週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2021年の報告数は、2年連続で1,000例を下回った。

梅毒は、性行為･オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

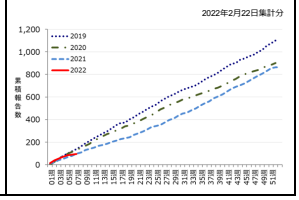


表２．大阪府全数報告数（2022年 第7週2月14日～2月20日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数 府内累積
４類感染症	E型肝炎	1					1				1
５類感染症	急性脳炎	1							1		1
	梅毒	5	1			2	1	1			94
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	79,327	2020年1月以降累計　584,149								
結核（2021年12月分）	結核　新登録患者数：104名（内　肺･喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,178名、内　肺･喀痰塗抹陽性　449名）										

（2022年2月22日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第8週（2月21日～2月27日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向続く」

第8週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は592例であり、前週比7.1%減であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.43、0.17、0.16、0.09、0.07である。

感染性胃腸炎は前週比6%減の478例で、中河内3.75、南河内3.38、大阪市北部3.14、大阪市南部2.58、泉州2.40であった。

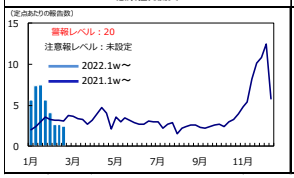
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は27%増の33例で、大阪市南部0.58、中河内0.40、大阪市北部0.29である。

RSウイルス感染症は48%増の31例で、大阪市西部0.90、三島･南河内0.38であった。

咽頭結膜熱は7%減の14例で、大阪市北部0.36、三島0.19、堺市0.11である。

第5週以降、小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計が1,000例未満という状況が続いている。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

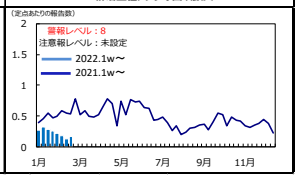


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第8週2月21日～2月27日）

第8週の順位	第7週の順位	感染症	2022年第8週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第8週の定点あたり報告数	2022年第8週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.43	6%減	3.07	2歳_14%
2	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.17	27%増	0.54	5歳_21%
3	4	RSウイルス感染症	0.16	48%増	0.76	2歳_32%
4	2	突発性発しん	0.09	59%減	0.28	1歳_56%
5	5	咽頭結膜熱	0.07	7%減	0.13	2歳_43%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.00		0.02	10-14歳(1例)_100%

第8週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2021年の報告数は、2年連続で1,000例を下回った。

梅毒は、性行為･オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

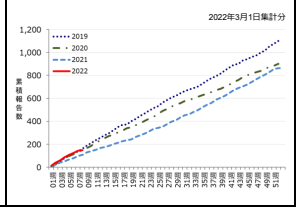


表２．大阪府全数報告数（2022年 第8週2月21日～2月27日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数 府内累積
３類感染症	細菌性赤痢	1							1		1
	腸管出血性大腸菌感染症	1								1	2
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1		1							15
	後天性免疫不全症候群	1			1						9
	梅毒	4					1		1	2	148
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	58,417	2020年1月以降累計　642,552								
結核（2021年12月分）	結核　新登録患者数：104名（内　肺･喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,178名、内　肺･喀痰塗抹陽性　449名）										

（2022年3月1日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2022年 第9週（2月28日～3月6日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 増加」

第9週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は639例であり、前週比7.9%増であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.52、0.26、0.13、0.11、0.09である。

感染性胃腸炎は前週比4%増の496例で、中河内3.70、南河内3.63、三島2.94、豊能2.61、大阪市南部2.47であった。

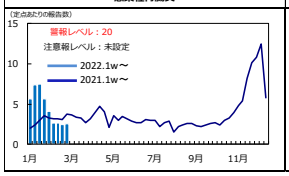
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は55%増の51例で、大阪市南部0.58、中河内0.45、南河内0.44である。

咽頭結膜熱は57%増の22例で、大阪市北部0.71、三島0.19、北河内0.15であった。

RSウイルス感染症は45%減の17例で、大阪市北部0.36、大阪市南部0.16、大阪市東部0.14である。

第4週以降、小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計の減少が続いていたが、第9週は増加がみられた。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

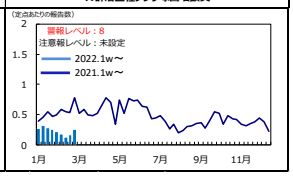


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第9週2月28日～3月6日）

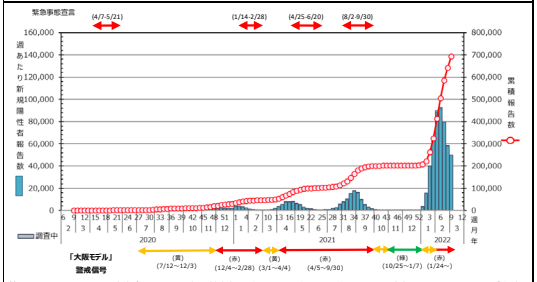
第9週の順位	第8週の順位	感染症	2022年第9週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第9週の定点あたり報告数	2022年第9週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.52	4%増	3.76	2歳_13%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.26	55%増	0.79	20歳以上_14%
3	4	突発性発しん	0.13	39%増	0.30	1歳_56%
4	5	咽頭結膜熱	0.11	57%増	0.15	1歳_41%
5	3	RSウイルス感染症	0.09	45%減	0.94	1歳_35%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.03	700%増	0.01	3歳,15-19歳,_25%

第9週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第9週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は49,825名であり、前週より15%減少した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第9週2月28日～3月6日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞[週報]＞全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	細菌性赤痢	2							2		3
	腸管出血性大腸菌感染症	3			3						5
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1			1						12
5類感染症	アメーバ赤痢	2					1			1	10
	梅毒	6			1	2				3	161
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1								1	3
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	####	2020年1月以降累計 692,351								
結核（2022年1月分）	結核　新登録患者数：52名（内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）（府内累積報告数　52名、内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）										

（2022年3月8日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2022年 第10週（3月7日～3月13日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 減少」

第10週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は590例であり、前週比7.7%減であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.38、0.18、0.11、0.11、0.08である。

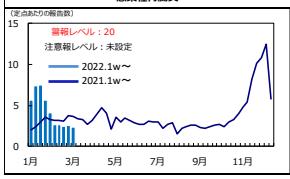
感染性胃腸炎は前週比5%減の469例で、中河内3.25、三島3.13、大阪市北部3.07、南河内2.88、大阪市南部2.53であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は57%減の22例で、北河内0.23、三島0.19、泉州・中河内0.15である。

咽頭結膜熱は5%減の21例で、大阪市北部0.93、北河内0.15、中河内・大阪市西部0.10であった。

RSウイルス感染症は6%減の16例で、中河内0.30、大阪市西部0.20、大阪市北部・大阪市東部0.14である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

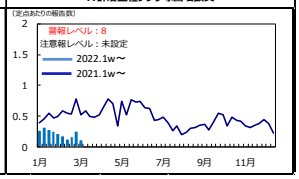


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第10週3月7日～3月13日）

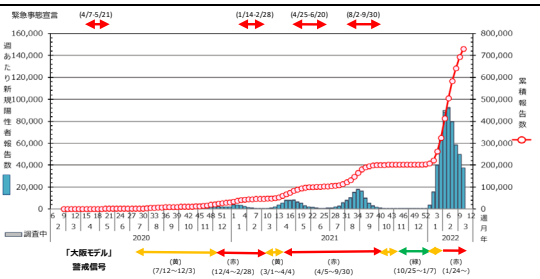
第10週の順位	第9週の順位	感染症	2022年第10週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第10週の定点あたり報告数	2022年第10週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.38	5%減	3.68	2歳_15%
2	3	突発性発しん	0.18	44%増	0.37	1歳_53%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.11	57%減	0.53	4歳,20歳以上,_18%
4	4	咽頭結膜熱	0.11	5%減	0.14	4歳_48%
5	5	RSウイルス感染症	0.08	6%減	1.21	1歳_44%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.00	100%減	0.01	

第10週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第10週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は37,382名であり、前週より25%減少した。新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言は2021年9月30日に解除された。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第10週3月7日～3月13日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞[週報]＞全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	細菌性赤痢	1							1		4
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2			1					1	14
5類感染症	アメーバ赤痢	1								1	11
	後天性免疫不全症候群	1								1	12
	梅毒	7							1	6	174
	麻しん（臨床診断例）	1	1								1
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	37,382	2020年1月以降累計 729,702								
結核（2022年1月分）	結核　新登録患者数：52名（内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）（府内累積報告数　52名、内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）										

（2022年3月15日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第11週（3月14日～3月20日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 減少」

第11週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は568例であり、前週比3.7%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.19、0.24、0.13、0.11、0.10である。

感染性胃腸炎は前週比8%減の431例で、南河内3.06、中河内3.05、北河内2.58、泉州2.30、三島2.19であった。

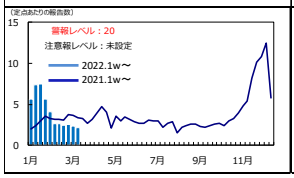
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%増の25例で、南河内0.31、大阪市南部0.26、三島0.19である。

咽頭結膜熱は5%増の22例で、大阪市北部0.36、中河内0.25、南河内0.19であった。

RSウイルス感染症は19%増の19例で、大阪市北部0.43、大阪市西部0.30、三島0.19である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の症例数は微増であるが、昨年の当該週と比べると定点当たり報告数は減少している。

感染性胃腸炎



咽頭結膜熱

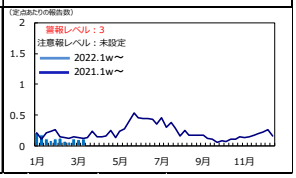


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第11週3月14日～3月20日）

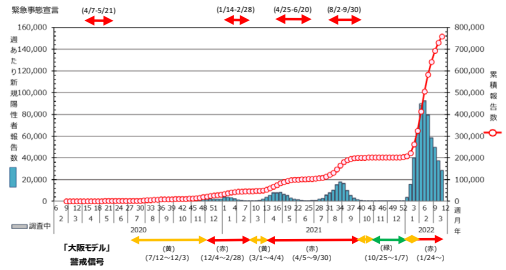
第11週の順位	第10週の順位	感染症	2022年第11週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第11週の定点あたり報告数	2022年第11週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.19	8%減	3.34	１歳_15%
2	2	突発性発しん	0.24	33%増	0.34	１歳_54%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.13	14%増	0.60	３歳_20%
4	4	咽頭結膜熱	0.11	5%増	0.12	１歳_50%
5	5	RSウイルス感染症	0.10	19%増	1.49	２歳_37%

第11週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第11週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は28,607名であり、前週より23%減少した。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第11週3月14日～3月20日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2							1	1		7
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1									19
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1							1			4
	梅毒	4	2								2	183
	百日咳	1									1	6
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	28,607	2020年1月以降累計　758,281									
結核（2022年1月分）	結核　新登録患者数：52名（内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）（府内累積報告数　52名、内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）											

（2022年3月22日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第12週（3月21日～3月27日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～　手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉・密集・密接の回避が重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 大きく減少」

第12週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は460例であり、前週比19.0%減であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.74、0.23、0.15、0.08、0.06である。

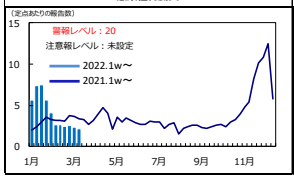
感染性胃腸炎は前週比21%減の341例で、大阪市南部2.61、南河内2.44、中河内2.40、北河内2.12、豊能1.70であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は16%増の29例で、中河内0.45、堺市0.32、南河内0.25である。

流行性角結膜炎は100%増の4例で、大阪市西部0.50、三島0.50、泉州0.17であった。

咽頭結膜熱は45%減の12例で、南河内0.25、中河内0.20、三島0.06である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

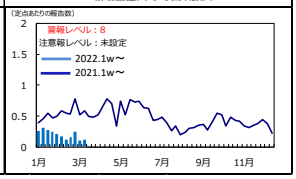


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第12週3月21日～3月27日）

第12週の順位	第11週の順位	感染症	2022年第12週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第12週の定点あたり報告数	2022年第12週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	1.74	21%減	3.24	２歳_14%
2	2	突発性発しん	0.23	6%減	0.35	１歳_60%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.15	16%増	0.51	３歳_14%
4	6	流行性角結膜炎	0.08	100%増	0.15	20歳以上_75%
5	4	咽頭結膜熱	0.06	45%減	0.14	１歳未満,１歳_33%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	100%増	0.01	10-14歳_100%

第12週のコメント

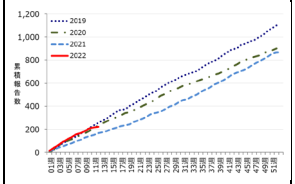
～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2020年の報告数は、3年ぶりに、1,000例を下回った。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第12週3月21日～3月27日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
４類感染症	デング熱	2							2			2
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		16
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1								1		20
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1			1							7
	侵襲性肺炎球菌感染症	2		1							1	16
	梅毒	6	1						2		3	223
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	22,837	2020年1月以降累計　781,081									
結核（2022年1月分）	結核　新登録患者数：52名（内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）（府内累積報告数　52名、内　肺・喀痰塗抹陽性　23名）											

（2022年3月29日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第13週（3月28日～4月3日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉･密集･密接の回避が重要

定点把握感染症

「小児科･眼科定点疾患の報告数 少ない状況続く」

第13週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は524例であり、前週比13.9%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.82、0.28、0.27、0.10、0.09である。

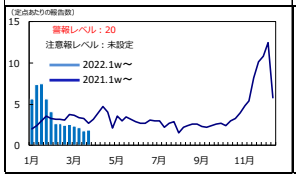
感染性胃腸炎は前週比4%増の356例で、南河内2.63、中河内2.30、泉州2.20、大阪市南部2.06、堺市1.89であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は83%増の53例で、大阪市南部･中河内0.50、北河内0.38である。

咽頭結膜熱は67%増の20例で、大阪市南部0.22、南河内0.19、北河内0.15であった。

RSウイルス感染症は80%増の18例で、大阪市西部0.80、中河内0.15、南河内0.13である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

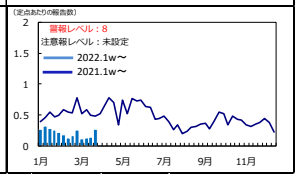


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第13週3月28日～4月3日）

第13週の順位	第12週の順位	感染症	2022年第13週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第13週の定点あたり報告数	2022年第13週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	1.82	4%増	2.70	１歳_14%
2	2	突発性発しん	0.28	22%増	0.32	１歳_53%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.27	83%増	0.49	３歳_15%
4	5	咽頭結膜熱	0.10	67%増	0.24	１歳_35%
5	7	RSウイルス感染症	0.09	80%増	1.90	１歳_33%

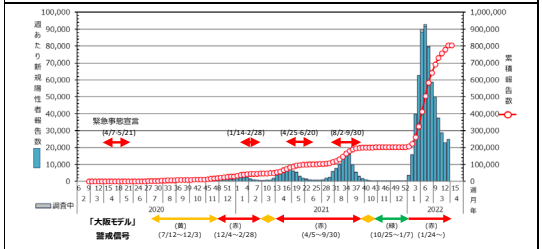
第13週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第13週の新型コロナウイルス感染症の過あたり新規陽性者報告数は24,824名であり、前週より8.7%増加した。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫･エアロゾル･接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第13週3月28日～4月3日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1			1						8
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	17
５類感染症	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					9
	後天性免疫不全症候群	2								2	17
	侵襲性肺炎球菌感染症	4	1	2					1		21
	梅毒	6				2				4	251
	百日咳	1							1		8
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	24,824	2020年1月以降累計 807,144								
結核（2022年2月分）	結核 新登録患者数：40名（内 肺･喀痰塗抹陽性 14名）（府内累積報告数 92名、内 肺･喀痰塗抹陽性 37名）										

（2022年4月5日 集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第14週（4月4日～4月10日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉･密集･密接の回避が重要

定点把握感染症

「小児科定点･眼科定点疾患報告数 ほぼ横ばい」

第14週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は529例であり、前週比1.0%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.87、0.30、0.27、0.08、0.06である。

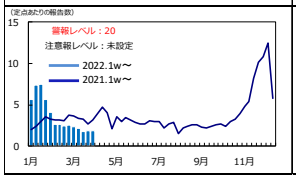
感染性胃腸炎は前週比3%増の367例で、南河内3.81、大阪市南部2.89、北河内2.46、三島1.81、泉州1.80であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の52例で、中河内1.00、三島0.31、大阪市北部0.29である。

咽頭結膜熱は25%減の15例で、南河内0.19、大阪市南部0.17、大阪市北部0.14であった。

水痘は71%増の12例で、堺市0.16、大阪市東部･大阪市北部0.14である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

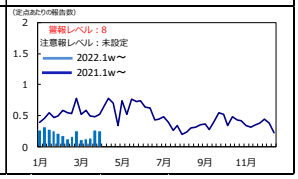


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第14週4月4日～4月10日）

第14週の順位	第13週の順位	感染症	2022年第14週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第14週の定点あたり報告数	2022年第14週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	1.87	3%増	3.19	２歳_16%
2	2	突発性発しん	0.30	5%増	0.32	１歳_53%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.27	2%減	0.53	３歳_17%
4	4	咽頭結膜熱	0.08	25%減	0.15	１歳_27%
5	7	水痘	0.06	71%増	0.09	１歳，５歳，８歳，_17%

第14週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～ 2021年の大阪府の報告数は、25例であった。

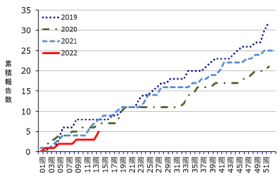
全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。

術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、肺炎、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなど易感染者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。

VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗菌薬の投与とともに感染巣の洗浄やドレナージなどを適宜組み合わせて行う。



感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)

バンコマイシン耐性腸球菌感染症(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第14週4月4日～4月10日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	3	1							2	20
５類感染症	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				10
	後天性免疫不全症候群	1								1	19
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1					1				3
	侵襲性肺炎球菌感染症	2	1		1						23
	梅毒	6	1			1		1		3	272
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	2	2								5
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	26,917	2020年1月以降累計 832,818								
結核（2022年2月分）	結核 新登録患者数：40名（内 肺･喀痰塗抹陽性 14名）（府内累積報告数 92名、内 肺･喀痰塗抹陽性 37名）										

（2022年4月12日 集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第15週（4月11日～4月17日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 増加」

第15週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は663例であり、前週比 25.3%増であった。定点当たり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ 2.43、0.28、0.26、0.14、0.10である。

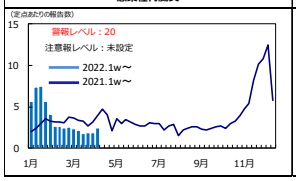
感染性胃腸炎は前週比 31%増の479例で、南河内5.13、北河内・泉州2.65、中河内・大阪市南部2.50であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は増減なしの52例で、中河内0.75、泉州0.50、堺市0.32である。

RSウイルス感染症は 460%増の28例で、大阪市西部0.70、南河内0.44、中河内0.40であった。

咽頭結膜熱は 27%増の19例で、大阪市西部0.40、南河内0.25、大阪市北部・堺市0.21である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

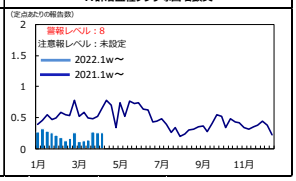


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第15週4月11日～4月17日）

第15週の順位	第14週の順位	感染症	2022年第15週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第15週の定点あたり報告数	2022年第15週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.43	31%増	3.95	１歳_20%
2	2	突発性発しん	0.28	5%減	0.35	１歳未満_45%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.26	0%増	0.66	３歳_23%
4	8	RSウイルス感染症	0.14	460%増	3.19	１歳_39%
5	4	咽頭結膜熱	0.10	27%増	0.15	１歳_42%

第15週のコメント

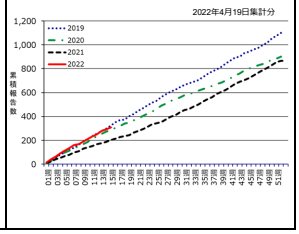
～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2021年の報告数は、2年連続で1,000例を下回った。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第15週4月11日～4月17日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1					1					9
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1									1	21
５類感染症	梅毒	15	1		2					12		308
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	25,973	2020年1月以降累計　858,790									
結核 （2022年2月分）	結核　新登録患者数：40名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　14名） （府内累積報告数　92名、内　肺・喀痰塗抹陽性　37名）										

（2022年4月19日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第16週（4月18日～4月24日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 さらに増加」

第16週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は825例であり、前週比24.4%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.85、0.42、0.31、0.25、0.18である。

感染性胃腸炎は前週比17%増の562例で、南河内4.69、大阪市北部3.71、中河内3.50、北河内3.35、泉州3.30であった。

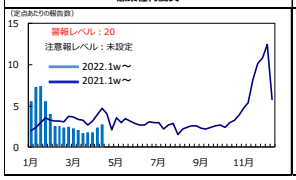
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%増の62例で、中河内0.90、大阪市南部0.67、大阪市北部0.43である。

RSウイルス感染症は75%増の49例で、中河内0.80、大阪市西部0.70、大阪市北部0.43であった。

咽頭結膜熱は89%増の36例で、堺市0.42、泉州0.40、大阪市北部0.29である。

4月から新たに集団保育に参加した乳幼児は各種の感染症に罹患する機会が増えるため、今後の発生動向に注意する必要がある。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

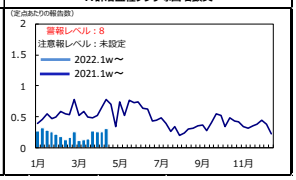


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第16週4月18日～4月24日）

第16週の順位	第15週の順位	感染症	2022年第16週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第16週の定点あたり報告数	2022年第16週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.85	17%増	4.73	１歳_19%
2	2	突発性発しん	0.42	49%増	0.49	１歳_57%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.31	19%増	0.78	５歳_19%
4	4	RSウイルス感染症	0.25	75%増	3.86	１歳_35%
5	5	咽頭結膜熱	0.18	89%増	0.16	１歳_31%

突発性発しんについて、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほ

第16週のコメント

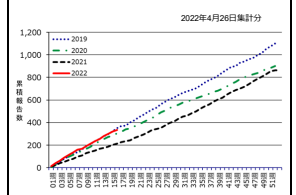
～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2021年の報告数は、2年連続で1,000例を下回った。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第16週4月18日～4月24日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1							1			10
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型） レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1 1								1 1		23
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		2	1							28
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1							1			5
	後天性免疫不全症候群	1							1			22
	侵襲性肺炎球菌感染症	4		1			2				1	27
	梅毒	13	1	2	1				1		8	334
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	20,960	2020年1月以降累計　879,750									
結核 （2022年2月分）	結核　新登録患者数：40名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　14名） （府内累積報告数　92名、内　肺・喀痰塗抹陽性　37名）										

（2022年4月26日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第17･18週（4月25日～5月8日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「咽頭結膜熱　増加」

第17週と第18週をあわせて報告する。大型連休のための医療機関の診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第17週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は760例であり、前週比7.9%減であった。定点当たり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.76、0.35、0.23、0.21、0.17である。

第18週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は760例であり、前週と同数であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.76、0.38、0.20、0.19、0.16である。

感染性胃腸炎は前週より1例増加の544例で、南河内4.06、大阪市北部4.00、三島3.82、中河内3.30、北河内2.65であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の40例で、大阪市南部0.44、大阪市西部0.40、三島・中河内・泉州0.35である。

咽頭結膜熱は9%増の37例で、泉州0.70、北河内0.27、南河内0.25であった。

流行性角結膜炎は300%増の8例で、豊能0.80、大阪市南部0.50、三島0.25である。

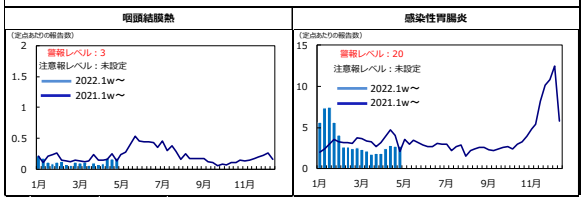


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第18週5月2日～5月8日）

第18週の順位	第17週の順位	感染症	2022年第18週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第18週の定点あたり報告数	2022年第18週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.76	0%増	2.08	１歳_20%
2	2	突発性発しん	0.38	9%増	0.21	１歳_59%
3	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.20	2%減	0.34	７歳_20%
4	5	咽頭結膜熱	0.19	9%増	0.14	１歳_38%
5	7	流行性角結膜炎	0.16	300%増	0.04	20歳以上_62%

第18週のコメント

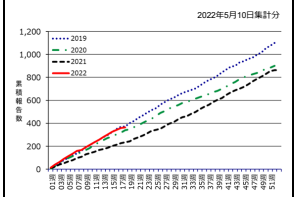
～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、大阪府における2021年の報告数は、2年連続で1,000例を下回った。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第18週5月2日～5月8日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞ 全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾病名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1								1		29
	侵襲性肺炎球菌感染症	1						1				31
	梅毒	5	1		1					3		365
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1								1		7
	百日咳	1								1		10
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	16,013	2020年1月以降累計　913,407									
結核 (2022年3月分)	結核　新登録患者数：98名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　231名、内　肺・喀痰塗抹陽性　88名）											

（2022年5月10日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第19週（5月9日～5月15日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加」

第19週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,044例であり、前週比37.4%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、咽頭結膜熱、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.86、0.36、0.35、0.32、0.17である。

感染性胃腸炎は前週比40%増の761例で、南河内6.06、中河内5.70、大阪市北部5.43、泉州4.45、大阪市南部3.67であった。

咽頭結膜熱は84%増の68例で、北河内0.73、泉州0.55、大阪市西部0.50である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は58%増の63例で、北河内0.81、中河内0.70、堺市0.58であった。

RSウイルス感染症は17%増の34例で、大阪市西部0.40、大阪市北部0.36、大阪市南部0.28である。

第4週以来、小児科・眼科定点疾患の報告数の総計が1,000例以上となった。

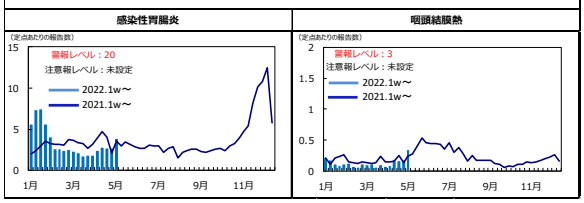


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第19週5月9日～5月15日）

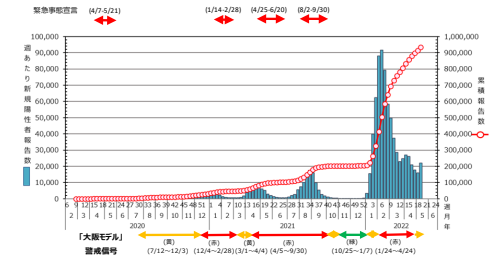
第19週の順位	第18週の順位	感染症	2022年第19週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第19週の定点あたり報告数	2022年第19週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	3.86	40%増	3.55	１歳_19%
2	2	突発性発しん	0.36	5%減	0.31	１歳_48%
3	4	咽頭結膜熱	0.35	84%増	0.24	１歳_46%
4	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.32	58%増	0.73	４歳,５歳_14%
5	6	RSウイルス感染症	0.17	17%増	2.77	１歳未満_35%

第19週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第19週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は21,920名であり、前週より37%増加した。現在、大阪モデルは警戒信号（黄）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第19週5月9日～5月15日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞ 全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾病名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	1		1							15
４類感染症	日本紅斑熱	1							1			1
	レジオネラ症（肺炎型）	2		1							1	27
５類感染症	アメーバ赤痢	2			1			1				19
	急性脳炎	1					1					2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1									1	12
	後天性免疫不全症候群	1									1	25
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1				1				1	37
	梅毒	13				1		1	1	10		425
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	21,920	2020年1月以降累計　935,325									
結核 (2022年3月分)	結核　新登録患者数：98名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　231名、内　肺・喀痰塗抹陽性　88名）											

（2022年5月17日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第20週（5月16日～5月22日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加つづく」

第20週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,201例であり、前週比15.0%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、突発性発しん、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.50、0.40、0.37、0.36、0.25である。

感染性胃腸炎は前週比16%増の886例で、南河内7.31、大阪市北部6.79、北河内5.77、三島4.65、中河内4.45であった。

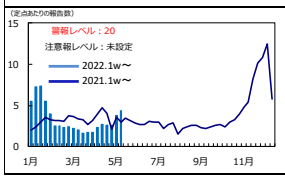
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は24%増の78例で、中河内1.15、北河内0.65、大阪市東部0.43である。

咽頭結膜熱は7%増の73例で、北河内0.77、大阪市北部0.71、堺市0.47であった。

RSウイルス感染症は44%増の49例で、豊能0.74、大阪市北部0.57、南河内0.44であった。

RSウイルス感染症について、今後の動向に注意が必要である。

感染性胃腸炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

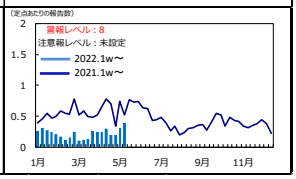


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第20週5月16日～5月22日）

第20週の順位	第19週の順位	感染症	2022年第20週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第20週の定点あたり報告数	2022年第20週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.50	16%増	2.98	１歳_23%
2	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.40	24%増	0.53	４歳_17%
3	3	咽頭結膜熱	0.37	7%増	0.28	１歳_49%
4	2	突発性発しん	0.36	0%増	0.35	１歳_59%
5	5	RSウイルス感染症	0.25	44%増	4.13	１歳_37%

第20週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は、年間報告数が過去最高であった2018年の同時期より多くなっている。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。大阪府では2018年の1,188 例が過去最高となっている。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒とは(国立感染症研究所)

大阪府感染症情報センター梅毒サイトはこちら

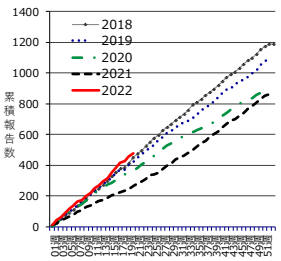


表２．大阪府全数報告数（2022年 第20週5月16日～5月22日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3	1	1	1							18
４類感染症	Ａ型肝炎	1								1		2
	レジオネラ症（肺炎型）	1							1			28
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1									32
	後天性免疫不全症候群	2								2		29
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1		1
	梅毒	19	1			2			2	14		476
	百日咳	1			1							12
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	19,802	2020年1月以降累計　955,119									
結核（2022年3月分）	結核　新登録患者数：98名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名）（府内累積報告数　231名、内　肺・喀痰塗抹陽性　88名）										

（2022年5月24日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第21週（5月23日～5月29日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「咽頭結膜熱　増加」

第21週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,362例であり、前週比13.4%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.98、0.64、0.36、0.30、0.30である。

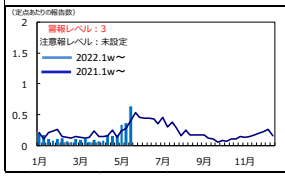
感染性胃腸炎は前週比11%増の981例で、南河内9.19、中河内7.05、北河内5.81、泉州5.15、三島5.12であった。

咽頭結膜熱は74%増の127例で、中河内1.10、大阪市北部1.07、北河内1.00である。

RSウイルス感染症は45%増の71例で、豊能1.13、大阪市北部0.57、南河内・大阪市西部0.50であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%減の60例で、中河内0.90、泉州0.55、北河内0.42である。

咽頭結膜熱



感染性胃腸炎

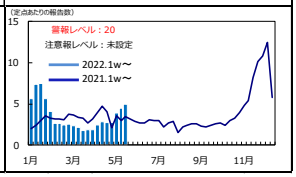


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第21週5月23日～5月29日）

第21週の順位	第20週の順位	感染症	2022年第21週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第21週の定点あたり報告数	2022年第21週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.98	11%増	3.36	１歳_20%
2	3	咽頭結膜熱	0.64	74%増	0.41	１歳_50%
3	5	RSウイルス感染症	0.36	45%増	5.03	１歳_34%
4	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.30	23%減	0.76	３歳_18%
4	4	突発性発しん	0.30	15%減	0.38	１歳_52%

第21週のコメント

～日本紅斑熱～ 大阪府では2022年、21週時点で3例の報告があり、過去4年間の同時期と比較して多い

全数把握感染症

日本紅斑熱

日本紅斑熱は、紅斑熱群リケッチアの一種 *Rickettsia japonica* を起因病原体とし、野山でマダニに刺咬されることにより感染する。媒介ダニの活動が活発化する４月～10月に発生し、特に9月、10月は多い。自然界で保菌あるいは感染する動物として、げっ歯類、野生のシカ、イノシシなどがあげられる。

潜伏期は2～8日であり、頭痛、発熱、倦怠感を伴って発症する。発熱、発しん、刺し口が主要三徴候であるが、必ずしも、刺し口があるとは限らない。発しんは、体幹部より四肢末端部に強く出現し、検査所見では、肝逸脱酵素の上昇、血小板の減少が認められる。治療には、抗菌薬投与が効果的であり、第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬である。また、ニューキノロン系抗菌薬が有効であるとの報告もある。β-ラクタム系の抗菌薬は無効である。大阪府では2020年に過去最多の11例の報告があった。

日本紅斑熱とは（大阪健康安全基盤研究所）

日本紅斑熱とは（国立感染症研究所）

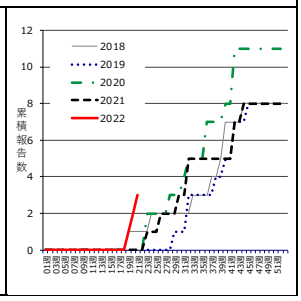


表２．大阪府全数報告数（2022年 第21週5月23日～5月29日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2		1						1		20
４類感染症	日本紅斑熱	1							1			3
５類感染症	クロイツフェルト・ヤコブ病	1					1					6
	後天性免疫不全症候群	4		1						3		34
	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1		40
	水痘（入院例）	2					2					6
	梅毒	14	3			1	1			9		517
	播種性クリプトコックス症	1								1		2
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	2								2		9
	百日咳	1				1						13
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	15,849	2020年1月以降累計　970,959									
結核（2022年3月分）	結核　新登録患者数：98名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名）（府内累積報告数　231名、内　肺・喀痰塗抹陽性　88名）										

（2022年5月31日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第22週（5月30日～6月5日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加」

第22週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,458例であり、前週比7.0%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、咽頭結膜熱、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.27、0.54、0.50、0.44、0.43である。

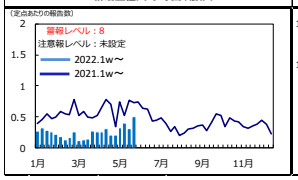
感染性胃腸炎は前週比5%増の1,028例で、南河内8.88、泉州6.40、中河内6.15、三島5.56、大阪市北部5.21であった。

咽頭結膜熱は17%減の106例で、大阪市南部1.50、中河内0.95、泉州0.75である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は63%増の98例で、中河内・大阪市西部0.90、泉州0.75であった。

RSウイルス感染症は17%増の83例で、大阪市北部1.07、大阪市西部0.70、南河内0.69である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎



感染性胃腸炎

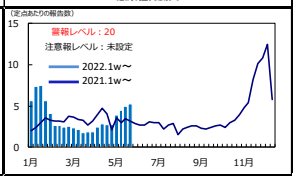


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第22週5月30日～6月5日）

第22週の順位	第21週の順位	感染症	2022年第22週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第22週の定点あたり報告数	2022年第22週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.27	5%増	3.12	１歳_22%
2	2	咽頭結膜熱	0.54	17%減	0.53	１歳_38%
3	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.50	63%増	0.73	４歳,20歳以上_14%
4	4	突発性発しん	0.44	42%増	0.35	１歳_47%
5	3	RSウイルス感染症	0.43	17%増	4.84	１歳_34%

第22週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌はO157だけではありません（大阪健康安全基盤研究所）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

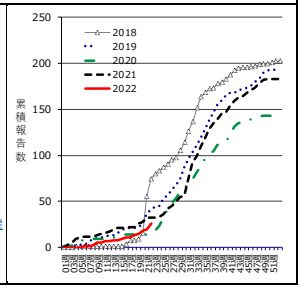


表２．大阪府全数報告数（2022年 第22週5月30日～6月5日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6	1		1		2			2	26
４類感染症	Ｅ型肝炎	1				1					2
	デング熱	1							1		3
	レジオネラ症（肺炎型）	2		1					1		32
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4								4	38
	急性脳炎	2	1				1				4
	後天性免疫不全症候群	1								1	36
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1	5
	侵襲性肺炎球菌感染症	3		1			1			1	45
	水痘（入院例）	1					1				7
	梅毒	15	1			1			1	12	555
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	1								10
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	10,546	2020年1月以降累計　981,504								
結核（2022年4月分）	結核　新登録患者数：76名（内　肺・喀痰塗抹陽性　21名）（府内累積報告数　313名、内　肺・喀痰塗抹陽性　111名）										

（2022年6月7日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第23週（6月6日～6月12日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加つづく」

第23週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,644例であり、前週比12.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.14、0.76、0.49、0.36、0.32である。

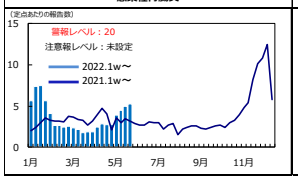
感染性胃腸炎は前週比17%増の1,203例で、南河内11.50、中河内7.10、北河内6.64、大阪市北部6.43、三島6.29であった。

咽頭結膜熱は41%増の149例で、大阪市南部1.17、三島・南河内0.94である。

RSウイルス感染症は17%増の97例で、大阪市西部1.20、大阪市北部1.14、豊能0.74であった。RSウイルス感染症は5週連続で増加している。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は29%減の70例で、中河内0.90、泉州0.70、堺市0.58であった。

感染性胃腸炎



咽頭結膜熱

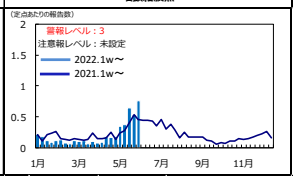


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第23週6月6日～6月12日）

第23週の順位	第22週の順位	感染症	2022年第23週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第23週の定点あたり報告数	2022年第23週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.14	17%増	2.90	１歳_22%
2	2	咽頭結膜熱	0.76	41%増	0.46	１歳_46%
3	5	RSウイルス感染症	0.49	17%増	4.18	１歳_32%
4	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.36	29%減	0.74	４歳_19%
5	4	突発性発しん	0.32	26%減	0.36	１歳_51%

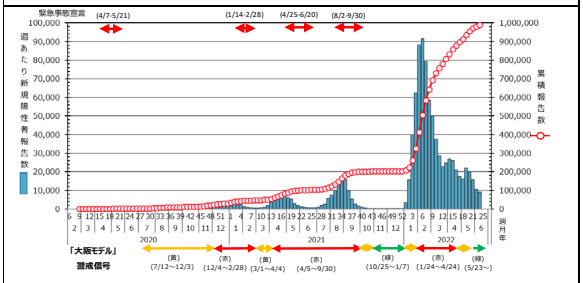
第23週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第23週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は9,046名であり、前週より14%減少した。大阪モデルは、5月23日に警戒解除（緑）になった。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第23週6月6日～6月12日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5		1			1	1	2		32
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	21
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1			1	1	1			44
	梅毒	16		1			1			14	592
	百日咳	2								2	16
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	9,046	2020年1月以降累計　990,549								
結核（2022年4月分）	結核　新登録患者数：76名（内　肺・喀痰塗抹陽性　21名）（府内累積報告数　313名、内　肺・喀痰塗抹陽性　111名）										

（2022年6月14日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第24週（6月13日～6月19日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　さらに増加」

第24週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,800例であり、前週比9.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.40、0.88、0.82、0.49、0.30である。

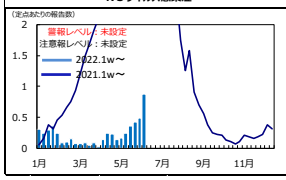
感染性胃腸炎は前週比4%増の1,254例で、南河内9.19、三島7.65、中河内7.30、北河内7.08、大阪市北部6.79であった。

RSウイルス感染症は78%増の173例で、大阪市北部2.50、大阪市西部1.70、大阪市東部1.36である。RSウイルス感染症は６週連続で増加している。

咽頭結膜熱は8%増の161例で、泉州1.50、堺市1.42、大阪市南部1.00であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は37%増の96例で、中河内1.40、大阪市南部0.72、堺市0.58である。

ＲＳウイルス感染症



感染性胃腸炎

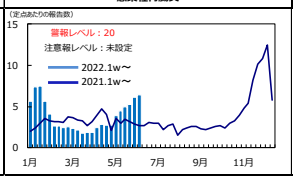


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第24週6月13日～6月19日）

第24週の順位	第23週の順位	感染症	2022年第24週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第24週の定点あたり報告数	2022年第24週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.40	4%増	2.69	１歳_20%
2	3	RSウイルス感染症	0.88	78%増	3.76	１歳_27%
3	2	咽頭結膜熱	0.82	8%増	0.45	１歳_46%
4	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.49	37%増	0.63	10-14歳_16%
5	5	突発性発しん	0.30	8%減	0.35	１歳_59%

第24週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌はO157だけではありません（大阪健康安全基盤研究所）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

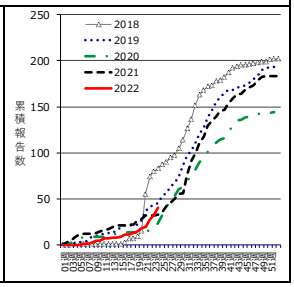


表２．大阪府全数報告数（2022年 第24週6月13日～6月19日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7	1	2	1	2	1					40
４類感染症	Ｅ型肝炎	1								1		4
	つつが虫病	1		1								1
	マラリア（熱帯熱）	1								1		1
５類感染症	ウイルス性肝炎（Ｃ型）	1								1		6
	急性弛緩性麻痺	1								1		1
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1						1				7
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2					1			1		15
	後天性免疫不全症候群	2							1	1		41
	水痘（入院例）	1		1								8
	梅毒	20	4		2	1	2	1		10		614
	播種性クリプトコックス症	1								1		3
	百日咳	1			1							17
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	7,810	2020年1月以降累計　998,358									
結核 （2022年4月分）	結核　新登録患者数：76名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　21名） （府内累積報告数　313名、内　肺・喀痰塗抹陽性　111名）											

（2022年6月21日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第25週（6月20日～6月26日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　増加続く」

第25週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,697例であり、前週比5.7%減であった。
定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.60、1.35、0.70、0.39、0.30である。

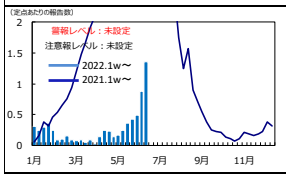
感染性胃腸炎は前週比13%減の1,097例で、南河内8.94、三島8.24、中河内6.65、泉州5.95、北河内5.48であった。

RSウイルス感染症は53%増の265例で、大阪市北部3.71、豊能2.43、中河内・大阪市西部1.70である。

咽頭結膜熱は14%減の138例で、大阪市南部1.44、北河内0.84、三島0.76であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は21%減の76例で、中河内1.50、大阪市北部0.57、三島0.41である。

ＲＳウイルス感染症



感染性胃腸炎

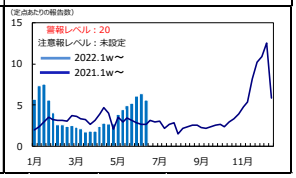


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第25週6月20日～6月26日）

第25週の順位	第24週の順位	感染症	2022年第25週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第25週の定点あたり報告数	2022年第25週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.60	13%減	2.65	１歳_20%
2	2	RSウイルス感染症	1.35	53%増	3.34	１歳_26%
3	3	咽頭結膜熱	0.70	14%減	0.44	１歳_43%
4	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.39	21%減	0.63	５歳_22%
5	5	突発性発しん	0.30	0%増	0.44	１歳_59%

第25週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は、年間報告数が過去最高であった2018年の同時期より多くなっている。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。大阪府では2018年の1,188 例が過去最高となっている。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒（大阪府感染症情報センター）
梅毒（大阪府感染症情報センター）

梅毒（大阪健康安全基盤研究所）
梅毒とは(国立感染症研究所)

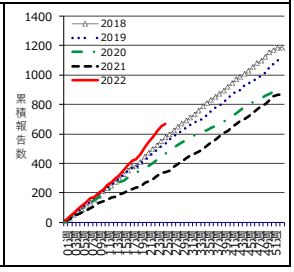


表２．大阪府全数報告数（2022年 第25週6月20日～6月26日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2						1		1		42
４類感染症	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1								1		33
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2						1		1		47
	後天性免疫不全症候群	2						1		1		46
	梅毒	19	2	2	3	1	1			10		671
	百日咳	1				1						18
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	8,535	2020年1月以降累計　1,006,882									
結核 （2022年4月分）	結核　新登録患者数：76名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　21名） （府内累積報告数　313名、内　肺・喀痰塗抹陽性　111名）											

（2022年6月28日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第26週（6月27日～7月3日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　急増」

第26週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,889例であり、前週比11.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.21、2.67、0.63、0.30、0.29である。

感染性胃腸炎は前週比7%減の1,021例で、南河内9.69、三島6.88、中河内6.85、大阪市南部6.00、北河内5.72であった。

RSウイルス感染症は98%増の524例で、大阪市北部8.86、南河内4.31、豊能3.52である。

咽頭結膜熱は11%減の123例で、大阪市南部1.72、大阪市北部0.93、南河内0.75であった。

手足口病は136%増の59例で、泉州0.55、堺市0.53、大阪市西部0.40である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は25%減の57例で、中河内0.80、大阪市南部0.56、大阪市北部0.43であった。

RSウイルス感染症は全ブロックで増加しており、今後の動向に注意が必要である。

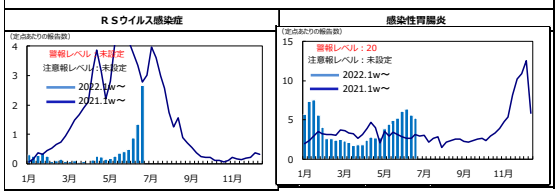


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第26週6月27日～7月3日）

第26週の順位	第25週の順位	感染症	2022年第26週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第26週の定点あたり報告数	2022年第26週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.21	7%減	3.10	１歳_21%
2	2	RSウイルス感染症	2.67	98%増	2.78	１歳_29%
3	3	咽頭結膜熱	0.63	11%減	0.44	１歳_36%
4	6	手足口病	0.30	136%増	0.06	１歳_36%
5	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.29	25%減	0.43	３歳_18%

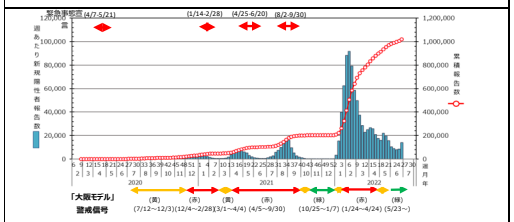
第26週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第26週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は13,990名であり、前週より64%増加した。大阪モデルは、5月23日に警戒解除（緑）になった。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第26週6月27日～7月3日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4			2				1	1	47
４類感染症	重症熱性血小板減少症候群	1					1				1
	日本紅斑熱	1		1							4
	レジオネラ症（肺炎型） （ポンティアック熱型）	5	1				1		1	1 1	39
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1	2	1						52
	水痘（入院例）	1	1								10
	梅毒	22	2	1		1				18	714
	バンコマイシン耐性黄球菌感染症	1								1	11
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	13,990	2020年1月以降累計　1,020,866								
結核 （2022年5月分）	結核　新登録患者数：96名　（内　肺・喉頭塗抹陽性　32名） （府内累積報告数　435名、内　肺・喉頭塗抹陽性　156名）										

（2022年7月5日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第27週（7月4日～7月10日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　増加継続」

第27週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,297例であり、前週比21.6%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.22、4.33、0.54、0.53、0.53である。

感染性胃腸炎は前週より2例増加の1,023例で、南河内9.94、中河内7.85、三島6.29、泉州5.35、北河内5.04であった。

RSウイルス感染症は62%増の848例で、大阪市北部9.14、大阪市西部7.00、豊能5.78である。

手足口病は80%増の106例で、大阪市北部1.21、大阪市南部1.17、大阪市東部1.00であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は82%増の104例で、中河内1.35、大阪市西部1.20、北河内0.64である。

咽頭結膜熱は16%減の103例で、大阪市南部1.28、泉州0.65、大阪市北部0.64であった。

RSウイルス感染症は全ブロックでの増加が続いており、今後の動向には注意が必要である。

今週、インフルエンザが府内で17例報告があった。

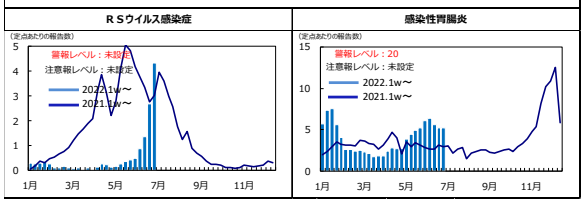


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第27週7月4日～7月10日）

第27週の順位	第26週の順位	感染症	2022年第27週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第27週の定点あたり報告数	2022年第27週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.22	増減なし	2.94	１歳_19%
2	2	RSウイルス感染症	4.33	62%増	2.98	１歳_29%
3	4	手足口病	0.54	80%増	0.10	１歳_34%
4	5	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.53	82%増	0.44	１歳_14%
5	3	咽頭結膜熱	0.53	16%減	0.34	１歳_39%

第27週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌はO157だけではありません（大阪健康安全基盤研究所）

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

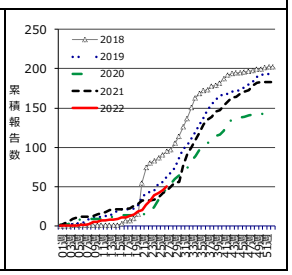


表２．大阪府全数報告数（2022年 第27週7月4日～7月10日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4	1		2			1			50
４類感染症	つつが虫病	1			1						2
	マラリア（熱帯熱）	1								1	2
	レジオネラ症（肺炎型）	4	1		1					2	44
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1				1				56
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1								1	9
	後天性免疫不全症候群	3								3	52
	梅毒	15			1	1	1		1	11	747
	風しん	1							1		1
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	30,359	2020年1月以降累計　1,051,218								
結核 （2022年5月分）	結核　新登録患者数：96名　（内　肺・喉頭塗抹陽性　32名） （府内累積報告数　435名、内　肺・喉頭塗抹陽性　156名）										

（2022年7月12日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第28週（7月11日～7月17日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　過去最高の報告数」

第28週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,453例であり、前週比6.8%増であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、咽頭結膜熱、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.49、4.26、0.48、0.38、0.33である。

RSウイルス感染症は前週比50%増の1,272例で、大阪市北部16.14、大阪市西部10.60、豊能6.65、北河内6.52、泉州6.45であり、統計を開始して以降最も多かった2021年のピーク（第21週）の報告数を上回った。

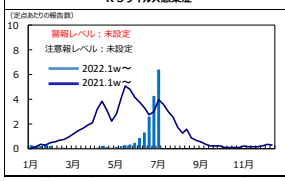
感染性胃腸炎は18%減の834例で、南河内9.63、中河内6.75、三島5.71である。

手足口病は10%減の95例で、大阪市北部1.00、三島0.76、堺市0.74であった。

咽頭結膜熱は28%減の74例で、泉州0.75、三島0.41、大阪市西部0.40である。

インフルエンザは341%増の75例で、10歳から29歳までで全体の53%を占めていた。定点あたり報告数は0.25で、中河内0.71、泉州0.45、大阪市南部0.33である。 来週以降の動向を注視する必要がある。

ＲＳウイルス感染症



感染性胃腸炎

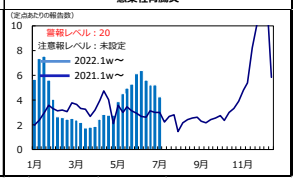


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第28週7月11日～7月17日）

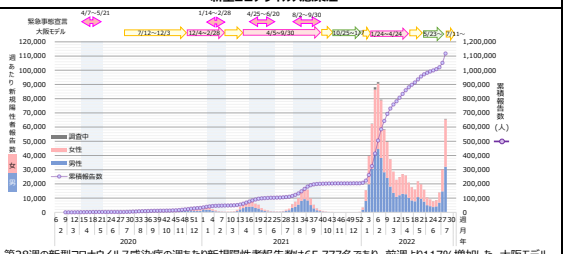
第28週の順位	第27週の順位	感染症	2022年第28週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第28週の定点あたり報告数	2022年第28週の年齢別患者発生数最大割合値
1	2	RSウイルス感染症	6.49	50%増	3.95	１歳_31%
2	1	感染性胃腸炎	4.26	18%減	2.92	１歳_17%
3	3	手足口病	0.48	10%減	0.03	１歳,２歳_25%
4	5	咽頭結膜熱	0.38	28%減	0.45	１歳_39%
5	6	突発性発しん	0.33	8%増	0.34	１歳_66%

第28週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第28週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は65,777名であり、前週より117%増加した。大阪モデルは、7月11日に警戒解除（緑）から警戒（黄信号）になった。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫･エアロゾル･接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第28週7月11日～7月17日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	1							1		53
４類感染症	オウム病	1								1		1
	レジオネラ症(肺炎型)	1			1							48
５類感染症	梅毒	13			1				1	11		766
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1								1		12
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	65,777	2020年1月以降累計　1,116,992									
結核（2022年5月分）	結核　新登録患者数：96名（内　肺・喀痰塗抹陽性　32名）（府内累積報告数　435名、内　肺・喀痰塗抹陽性　156名）											

（2022年7月19日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第29週（7月18日～7月24日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　前週に引き続き最高報告数を更新」

第29週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,363例であり、前週比3.7%減であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、咽頭結膜熱、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.23、3.21、0.47、0.32、0.32である。

RSウイルス感染症は前週比11%増の1,417例で、大阪市北部16.93、大阪市西部13.00、大阪市東部8.71、北河内7.84、三島7.59であった。

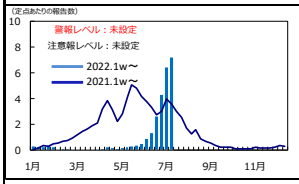
感染性胃腸炎は25%減の629例で、南河内5.56、中河内4.45、大阪市北部3.79である。

手足口病は3%減の92例で、堺市0.84、南河内0.75、大阪市北部0.64であった。

咽頭結膜熱は15%減の63例で、泉州0.60、中河内0.40、豊能0.39である。

インフルエンザは39%増の104例で、定点あたり報告数は0.35で、大阪市西部0.87、大阪市南部0.74、泉州0.67であった。

ＲＳウイルス感染症



感染性胃腸炎

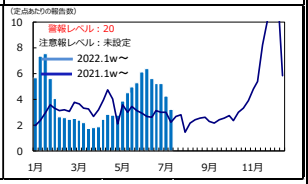


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第29週7月18日～7月24日）

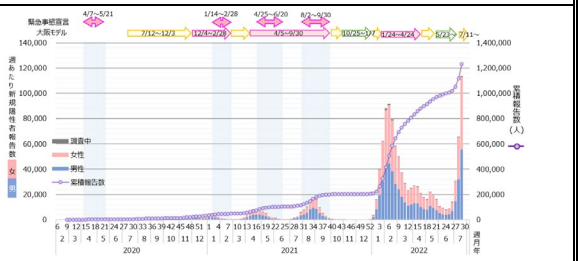
第29週の順位	第28週の順位	感染症	2022年第29週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第29週の定点あたり報告数	2022年第29週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	7.23	11%増	3.58	１歳_30%
2	2	感染性胃腸炎	3.21	25%減	2.15	１歳_18%
3	3	手足口病	0.47	3%減	0.06	１歳_39%
4	4	咽頭結膜熱	0.32	15%減	0.30	１歳_43%
4	5	突発性発しん	0.32	3%減	0.31	１歳_59%

第29週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第29週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は113,783名であり、前週より73%増加した。大阪モデルは、7月11日に警戒解除（緑）から警戒（黄信号）になった。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫･エアロゾル･接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉･密集･密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第29週7月18日～7月24日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	11		2	1	2				6		66
４類感染症	E型肝炎	1								1		5
	デング熱	1					1					4
	レジオネラ症（肺炎型）	2					1			1		50
５類感染症	アメーバ赤痢	1				1						24
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1									61
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1									17
	梅毒	11					1			10		804
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	113,783	2020年1月以降累計　1,230,773									
結核（2022年5月分）	結核　新登録患者数：96名（内　肺・喀痰塗抹陽性　32名）（府内累積報告数　435名、内　肺・喀痰塗抹陽性　156名）											

（2022年7月26日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第30週（7月25日～7月31日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　やや減少」

第30週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,189例であり、前週比7.4%減であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、咽頭結膜熱、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.39、2.86、0.68、0.36、0.29である。

RSウイルス感染症は前週比12%減の1,253例で、大阪市西部14.20、大阪市北部13.79、泉州8.25、堺市6.11、北河内5.64であった。

感染性胃腸炎は11%減の561例で、中河内4.90、南河内4.38、大阪市北部3.43である。

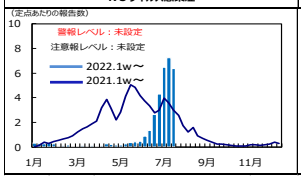
手足口病は45%増の133例で、中河内1.45、泉州1.30、大阪市東部0.86であった。

咽頭結膜熱は13%増の71例で、大阪市西部1.00、大阪市南部0.56、豊能0.52である。

流行性角結膜炎は36%増の15例で、中河内1.20、豊能0.60、三島0.50であった。

インフルエンザは45%減の57例で、定点あたり報告数は0.19である。中河内・大阪市南部0.48、泉州0.36であった。

ＲＳウイルス感染症



手足口病

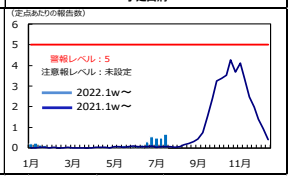


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第30週7月25日～7月31日）

第30週の順位	第29週の順位	感染症	2022年第30週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第30週の定点あたり報告数	2022年第30週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	6.39	12%減	2.99	１歳_30%
2	2	感染性胃腸炎	2.86	11%減	2.66	１歳_18%
3	3	手足口病	0.68	45%増	0.06	１歳_32%
4	4	咽頭結膜熱	0.36	13%増	0.38	１歳_30%
5	7	流行性角結膜炎	0.29	36%増	0.08	20歳以上_60%

突発性発しんについて、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほ

第30週のコメント

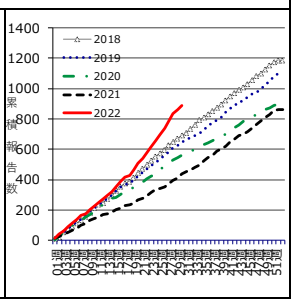
～梅毒～ 大阪府における梅毒累計報告数は、年間報告数が過去最高であった2018年の同時期より多くなっている。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例に増加している。大阪府では2018年の1,188 例が過去最高となっている。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



梅毒(大阪府感染症情報センター)
梅毒(大阪健康安全基盤研究所)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第30週7月25日～7月31日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6		1	1				1	3		76
４類感染症	Ａ型肝炎	1					1					3
５類感染症	アメーバ赤痢	2	1			1						26
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1						2		68
	侵襲性肺炎球菌感染症	1					1					52
	梅毒	28	2	2	1		1		1	21		888
	薬剤耐性アシネトバクター感染症	1					1					1
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	140,365	2020年1月以降累計　1,371,134									

結核 (2022年6月分)	結核　新登録患者数：81名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　528名、内　肺・喀痰塗抹陽性　194名）

（2022年8月2日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第31週（8月1日～8月7日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症の減少つづく」

第31週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,933例であり、前週比11.7%減であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、突発性発しん、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.97、2.24、0.66、0.25、0.24である。

RSウイルス感染症は前週比7%減の1,171例で、大阪市北部11.07、泉州8.37、堺市7.84、北河内6.92、大阪市南部6.28であった。

感染性胃腸炎は22%減の440例で、南河内4.88、中河内4.50、堺市2.26である。

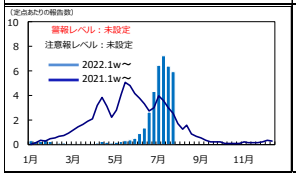
手足口病は3%減の129例で、中河内1.10、南河内0.75、堺市・泉州0.74であった。

突発性発しんは26%増の49例で、中河内・南河内0.50、大阪市西部0.40である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%減の48例で、中河内0.85、堺市0.37、三島0.29であった。

インフルエンザは63%減の21例で、定点あたり報告数は0.07である。中河内0.19、南河内・泉州0.13であった。

ＲＳウイルス感染症



インフルエンザ

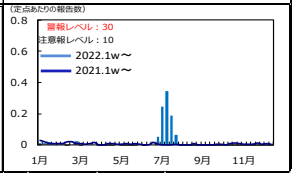


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第31週8月1日～8月7日）

第31週の順位	第30週の順位	感染症	2022年第31週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第31週の定点あたり報告数	2022年第31週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	5.97	7%減	2.46	１歳_33%
2	2	感染性胃腸炎	2.24	22%減	2.72	１歳_25%
3	3	手足口病	0.66	3%減	0.05	１歳_39%
4	8	突発性発しん	0.25	26%増	0.33	１歳_57%
5	6	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.24	6%減	0.34	４歳_23%

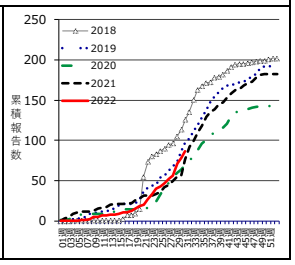
第31週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、



腸管出血性大腸菌はO157だけではありません（大阪健康安全基盤研究所）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第31週8月1日～8月7日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	9					1		2	6		87
４類感染症	Ａ型肝炎	1				1					1	4
	レジオネラ症（肺炎型）	1									1	56
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1									1	70
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2		1							1	22
	後天性免疫不全症候群	2									2	59
	侵襲性肺炎球菌感染症	4		2			1				1	56
	梅毒	13					1	2		10		913
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	140,002	2020年1月以降累計　1,511,133									

結核 (2022年6月分)	結核　新登録患者数：81名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　528名、内　肺・喀痰塗抹陽性　194名）

（2022年8月9日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第32週（8月8日～8月14日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 さらに減少」

第32週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,222例であり、前週比36.8%減であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、ヘルパンギーナ、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.51、1.38、0.59、0.22、0.20である。

RSウイルス感染症は前週比41%減の688例で、南河内5.81、泉州5.58、大阪市南部5.00、堺市4.74、北河内4.52であった。

感染性胃腸炎は38%減の271例で、南河内2.25、中河内2.10、堺市2.05である。

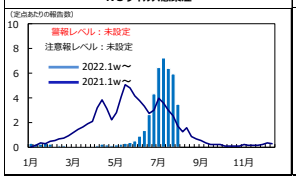
手足口病は11%減の115例で、南河内1.13、大阪市北部1.00、大阪市西部0.80であった。

ヘルパンギーナは2%減の43例で、大阪市北部0.71、大阪市西部0.70、中河内0.30である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%減の39例で、大阪市南部0.50、中河内0.45、南河内0.31であった。

今週、インフルエンザが府内で7例報告があった。

ＲＳウイルス感染症



手足口病

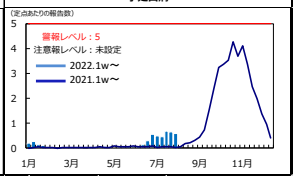


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第32週8月8日～8月14日）

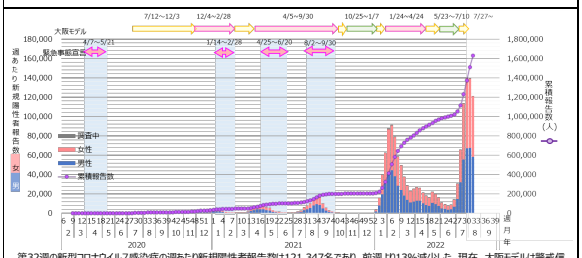
第32週の順位	第31週の順位	感染症	2022年第32週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第32週の定点あたり報告数	2022年第32週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	3.51	41%減	1.73	１歳_33%
2	2	感染性胃腸炎	1.38	38%減	1.41	１歳_21%
3	3	手足口病	0.59	11%減	0.04	１歳_49%
4	6	ヘルパンギーナ	0.22	2%減	0.04	１歳_42%
5	5	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.20	19%減	0.20	20歳以上_18%

第32週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第32週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は121,347名であり、前週より13%減少した。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第32週8月8日～8月14日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			1					2	93
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	4		1	1	1				1	61
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1							1		
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	28
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1								1	73
	後天性免疫不全症候群	2								2	61
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2							1	1	8
	梅毒	15	1	2						12	968
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	121,347	2020年1月以降累計　1,632,465								
結核 （2022年6月分）	結核　新登録患者数：81名 （内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　528名、内　肺・喀痰塗抹陽性　194名）										

（2022年8月16日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第33週（8月15日～8月21日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　増加」

第33週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,095例であり、前週比10.4%減であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.68、1.44、0.78、0.21、0.15である。

RSウイルス感染症は前週比24%減の526例で、大阪市西部5.20、大阪市北部4.14、北河内3.68、泉州3.47、堺市3.32であった。

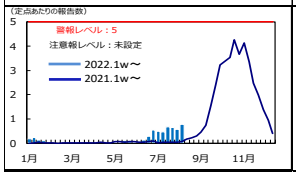
感染性胃腸炎は4%増の283例で、南河内2.31、中河内2.05、大阪市西部1.60である。

手足口病は33%増の153例で、三島1.29、南河内1.06、大阪市北部・大阪市西部1.00であった。

ヘルパンギーナは2%減の42例で、大阪市北部0.43、大阪市西部0.40、三島0.29である。

インフルエンザは府内で8例の報告があった。

手足口病



RSウイルス感染症

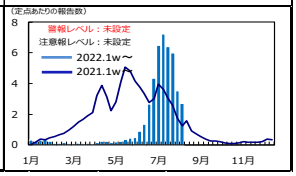


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第33週8月15日～8月21日）

第33週の順位	第32週の順位	感染症	2022年第33週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第33週の定点あたり報告数	2022年第33週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	2.68	24%減	1.23	１歳_31%
2	2	感染性胃腸炎	1.44	4%増	2.18	１歳_20%
3	3	手足口病	0.78	33%増	0.07	１歳，２歳_28%
4	4	ヘルパンギーナ	0.21	2%減	0.09	１歳_31%
5	6	突発性発しん	0.15	14%減	0.26	１歳_57%

第33週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は、年間報告数が過去最高であった2018年の同時期より多くなっている。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。大阪府では2018年の1,188 例が過去最高となっている。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒(大阪府感染症情報センター)

梅毒(大阪健康安全基盤研究所)

梅毒とは(国立感染症研究所)

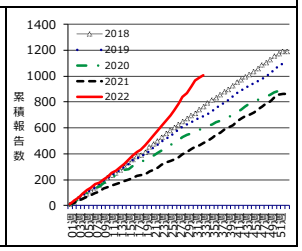


表２．大阪府全数報告数（2022年 第33週8月15日～8月21日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名 （ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2		1					1		97
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1		1							65
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	2								2	
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2			1	1					78
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1	23
	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1	58
	梅毒	17	1			2				14	1007
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	139,042	2020年1月以降累計　1,771,502								
結核 （2022年6月分）	結核　新登録患者数：81名 （内　肺・喀痰塗抹陽性　34名） （府内累積報告数　528名、内　肺・喀痰塗抹陽性　194名）										

（2022年8月23日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第34週（8月22日～8月28日）

今週のコメント

～手足口病・ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

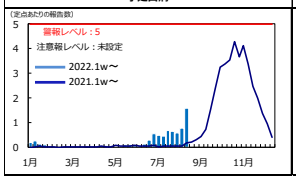
定点把握感染症

「手足口病・ヘルパンギーナ 増加」

第34週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は 1,341例であり、前週比 22.5%増であった。
報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、手足口病、ヘルパンギーナ、流行性角結膜炎の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 2.29、1.88、1.57、0.42、0.27である。
RSウイルス感染症は前週比14%減の452例で、南河内4.13、堺市3.68、泉州3.40、大阪市南部3.06、北河内2.64であった。
感染性胃腸炎は 31%増の370例で、中河内3.10、南河内2.94、堺市2.05である。
手足口病は 103%増の310例で、大阪市北部2.71、大阪市西部2.20、三島1.88であった。
ヘルパンギーナは 95%増の82例で、大阪市北部1.43、大阪市西部0.90、泉州0.80である。
流行性角結膜炎は 367%増の14例で、三島・南河内・泉州・大阪市南部が いずれも0.50であった。

インフルエンザは13%増の9例で、定点あたり報告数は0.03である。

手足口病



ヘルパンギーナ

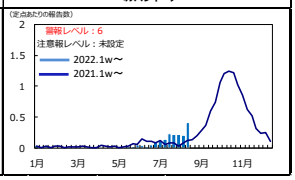


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第34週8月22日～8月28日）

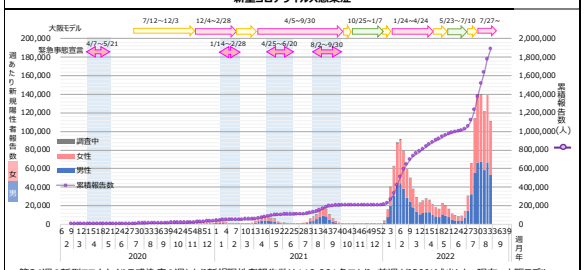
第34週の順位	第33週の順位	感染症	2022年第34週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第34週の定点あたり報告数	2022年第34週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	2.29	14%減	1.57	1歳_34%
2	2	感染性胃腸炎	1.88	31%増	2.42	1歳_19%
3	3	手足口病	1.57	103%増	0.17	1歳_43%
4	4	ヘルパンギーナ	0.42	95%増	0.12	1歳_40%
5	9	流行性角結膜炎	0.27	367%増	0.31	20歳以上_86%

第34週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第34週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は110,901名であり、前週より20%減少した。現在、大阪モデルは警戒信号（赤）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究)| 新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第34週8月22日～8月28日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4			1				3		101
4類感染症	デング熱	1							1		7
5類感染症	アメーバ赤痢	1						1			30
	急性脳炎	1							1		9
	後天性免疫不全症候群	1		1							63
	梅毒	4	1		1	1			1		1018
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	110,901	2020年1月以降累計　1,882,391								
結核（2022年6月分）	結核　新登録患者数：81名（内　肺・喀痰塗抹陽性　34名）（府内累積報告数　528名、内　肺・喀痰塗抹陽性　194名）										

（2022年8月30日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第35週（8月29日～9月4日）

今週のコメント

～手足口病・ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

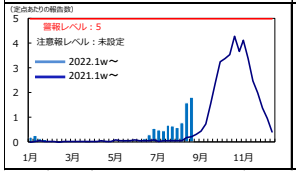
定点把握感染症

「手足口病・ヘルパンギーナ 増加続く」

第35週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,425例であり、前週比6.3%増であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症・感染性胃腸炎で以下、手足口病、ヘルパンギーナ、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.13、1.81、0.47、0.25である。
RSウイルス感染症は前週比7%減の419例で、南河内5.13、堺市4.58、大阪市南部2.72、大阪市西部2.10、北河内2.08であった。
感染性胃腸炎は13%増の419例で、中河内3.40、南河内3.06、泉州2.65、大阪市北部2.50、三島2.06である。
手足口病は15%増の356例で、大阪市北部4.00、三島2.35、南河内2.06であった。
ヘルパンギーナは12%増の92例で、大阪市北部0.79、南河内0.75、堺市0.58である。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%増の50例で、大阪市南部1.06、中河内0.60、泉州0.25であった。

インフルエンザは56%減の4例で、定点あたり報告数は0.01である。

手足口病



ヘルパンギーナ

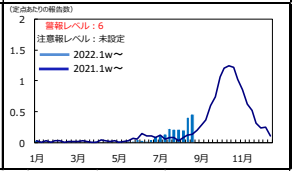


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第35週8月29日～9月4日）

第35週の順位	第34週の順位	感染症	2022年第35週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第35週の定点あたり報告数	2022年第35週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	2.13	7%減	0.87	1歳_34%
1	2	感染性胃腸炎	2.13	13%増	2.52	2歳_18%
3	3	手足口病	1.81	15%増	0.22	1歳_39%
4	4	ヘルパンギーナ	0.47	12%増	0.14	1歳_35%
5	6	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.25	19%増	0.31	4歳_26%

第35週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌はO157だけではありません（大阪健康安全基盤研究所）

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

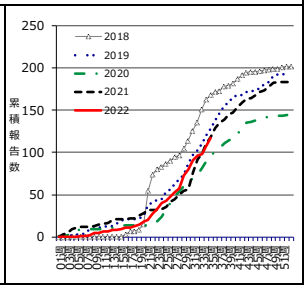


表２．大阪府全数報告数（2022年 第35週8月29日～9月4日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	10		2		1		1		6	117
4類感染症	A型肝炎	1								1	5
5類感染症	梅毒	26	2	2	2	2		1	1	16	1091
	百日咳	1								1	19
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	72,924	2020年1月以降累計　1,955,312								
結核（2022年7月分）	結核　新登録患者数：48名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　578名、内　肺・喀痰塗抹陽性　214名）										

（2022年9月6日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第36週（9月5日～9月11日）

今週のコメント

～手足口病・ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病・ヘルパンギーナ 増加継続」

第36週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,653例であり、前週比16.0%増であった。定点あたり報告数の第１位はRSウイルス感染症で以下、手足口病、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.43、2.31、2.22、0.60、0.30である。

RSウイルス感染症は前週比14%増の477例で、南河内6.94、堺市5.37、泉州2.84、北河内2.80、大阪市西部2.10であった。

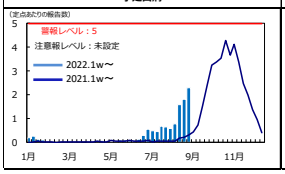
手足口病は27%増の453例で、大阪市南部3.44、三島3.41、南河内3.13である。

感染性胃腸炎は4%増の435例で、南河内3.81、中河内3.25、大阪市南部2.83であった。

ヘルパンギーナは27%増の117例で、大阪市北部0.93、泉州0.89、三島0.82である。

インフルエンザは50%増の6例で、定点あたり報告数は0.02であった。

手足口病



ヘルパンギーナ

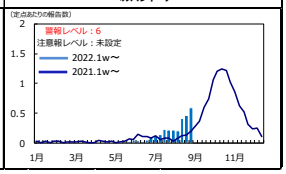


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第36週9月5日～9月11日）

第36週の順位	第35週の順位	感染症	2022年第36週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第36週の定点あたり報告数	2022年第36週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	RSウイルス感染症	2.43	14%増	0.69	1歳_29%
2	3	手足口病	2.31	27%増	0.31	1歳_37%
3	1	感染性胃腸炎	2.22	4%増	2.59	1歳_18%
4	4	ヘルパンギーナ	0.60	27%増	0.20	1歳_32%
5	7	突発性発しん	0.30	48%増	0.35	1歳_49%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.02	50%増	0.00	5歳_33%

第36週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は、年間報告数が過去最高であった2018年の同時期より多くなっている。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。大阪府では2022年第36週時点で1,130例と、現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった2018年の1,188例に迫る報告数となっている。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒(大阪府感染症情報センター)
梅毒とは(国立感染症研究所)

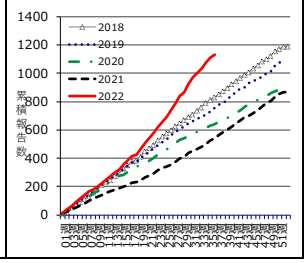


表２．大阪府全数報告数（2022年 第36週9月5日～9月11日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	8			1	2				5		128
４類感染症	デング熱	1							1			8
	日本紅斑熱	1								1		7
	レジオネラ症（肺炎型）	4					1		1	2		71
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1								1		87
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		25
	後天性免疫不全症候群	1				1						67
	侵襲性肺炎球菌感染症	1	1									62
	梅毒	21	2	1	1	2		1		14		1130
	百日咳	1								1		20
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	54,036	2020年1月以降累計　2,009,334									
結核（2022年7月分）	結核　新登録患者数：48名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　578名、内　肺・喀痰塗抹陽性　214名）											

（2022年9月13日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第37週（9月12日～9月18日）

今週のコメント

～手足口病・ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病・ヘルパンギーナ　今後の動向に注意が必要」

第37週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,467例であり、前週比11.3%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、RSウイルス感染症、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.23、2.16、1.81、0.55、0.30である。

手足口病は前週比4%減の437例で、中河内4.00、大阪市北部3.43、三島2.71、北河内2.60、南河内2.31であった。

RSウイルス感染症は11%減の424例で、堺市5.42、南河内4.63、北河内3.00である。

感染性胃腸炎は18%減の355例で、南河内3.75、中河内3.60、三島2.24であった。

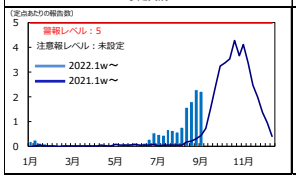
ヘルパンギーナは8%減の108例で、豊能1.09、三島1.06、大阪市北部0.79である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%増の58例で、大阪市南部1.22、中河内0.55、泉州0.42であった。

手足口病、ヘルパンギーナともに、地域によっては増加しており今後の動向に注意が必要である。

インフルエンザは50%減の3例で、定点あたり報告数は0.01であった。

手足口病



ヘルパンギーナ

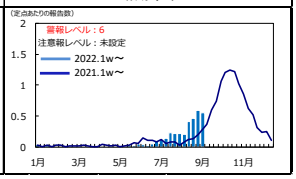


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第37週9月12日～9月18日）

第37週の順位	第36週の順位	感染症	2022年第37週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第37週の定点あたり報告数	2022年第37週の年齢別患者発生数最大割合値
1	2	手足口病	2.23	4%減	0.44	1歳_40%
2	1	RSウイルス感染症	2.16	11%減	0.55	1歳_31%
3	3	感染性胃腸炎	1.81	18%減	2.24	1歳_18%
4	4	ヘルパンギーナ	0.55	8%減	0.28	1歳_29%
5	6	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.30	12%増	0.36	3歳, 4歳, 10-14歳_16%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	50%減	0.00	10-14歳_67%

第37週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌（大阪健康安全基盤研究所）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

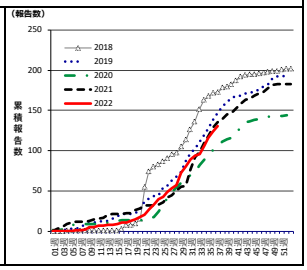


表２．大阪府全数報告数（2022年 第37週9月12日～9月18日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7		1		1	1		1	3		131
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		72
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1									88
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	1									11
	侵襲性肺炎球菌感染症	1							1			65
	梅毒	11				1			1	9		1,175
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	42,221	2020年1月以降累計　2,051,549									
結核（2022年7月分）	結核　新登録患者数：48名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　578名、内　肺・喀痰塗抹陽性　214名）											

（2022年9月20日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第38週（9月19日～9月25日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　減少」

第38週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,140例であり、前週比22.3%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.89、1.73、1.03、0.43、0.33である。

手足口病は前週比15%減の370例で、南河内3.81、大阪市西部2.80、大阪市南部2.56、三島2.41、中河内2.35であった。

感染性胃腸炎は4%減の340例で、中河内4.00、南河内2.19、北河内1.88である。

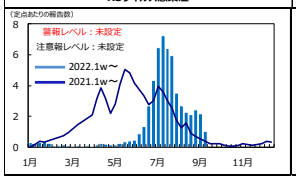
RSウイルス感染症は52%減の202例で、南河内2.56、堺市2.11、北河内1.12であった。

ヘルパンギーナは22%減の84例で、大阪市北部0.93、大阪市南部0.67、豊能0.61である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%増の65例で、大阪市南部0.78、泉州0.68、中河内0.65であった。

インフルエンザは167%増の8例で、定点あたり報告数は0.03である。

RSウイルス感染症



手足口病

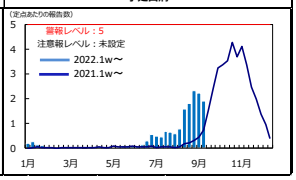


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第38週9月19日～9月25日）

第38週の順位	第37週の順位	感染症	2022年第38週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第38週の定点あたり報告数	2022年第38週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	1.89	15%減	0.74	1歳_36%
2	3	感染性胃腸炎	1.73	4%減	2.17	1歳_17%
3	2	RSウイルス感染症	1.03	52%減	0.38	1歳未満_28%
4	4	ヘルパンギーナ	0.43	22%減	0.36	1歳_38%
5	5	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.33	12%増	0.27	5歳_17%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.03	167%増	0.00	5歳,10-14歳_25%

第38週のコメント

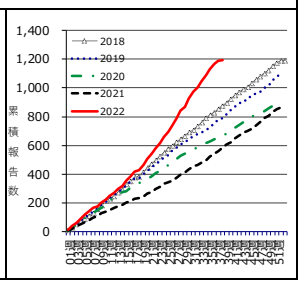
～梅毒～　大阪府における2022年の梅毒累計報告数は、現行の集計方法で過去最高となった。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。2022年第38週時点で大阪府では1,193例と、現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった2018年の1,188 例を超えた。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



梅毒(大阪府感染症情報センター)
梅毒(大阪健康安全基盤研究所)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第38週9月19日～9月25日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>［週報］> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4	1	1						2		141
4類感染症	デング熱	1							1			9
	レジオネラ症（肺炎型）	4	1				1		1	1	1	77
5類感染症	アメーバ赤痢	1		1								33
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	5			1		2			2		99
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1								1		12
	梅毒	6	2	1			1			2		1193
	破傷風	2		1			1					3
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	29,630	2020年1月以降累計　2,081,167									
結核（2022年7月分）	結核　新登録患者数：48名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　578名、内　肺・喀痰塗抹陽性　214名）											

（2022年9月27日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第39週（9月26日～10月2日）

今週のコメント

～手足口病・ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病・ヘルパンギーナ　再び増加」

第39週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,195例であり、前週比4.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.08、1.80、0.83、0.55、0.36である。

手足口病は前週比10%増の407例で、三島4.06、南河内3.06、大阪市北部2.79、大阪市西部2.70、大阪市南部2.50であった。

感染性胃腸炎は4%増の353例で、中河内3.40、南河内3.13、大阪市南部2.11である。

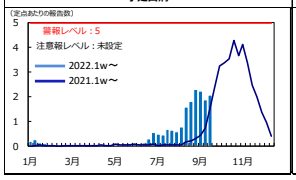
RSウイルス感染症は20%減の162例で、南河内2.25、堺市1.63、泉州0.89であった。

ヘルパンギーナは27%増の107例で、三島1.35、大阪市西部0.80、北河内0.76である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%増の71例で、大阪市南部1.61、中河内0.60、泉州0.53であった。

インフルエンザは63%減の3例で、定点あたり報告数は0.01である。

手足口病



ヘルパンギーナ

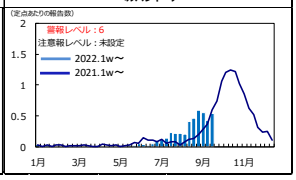


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第39週9月26日～10月2日）

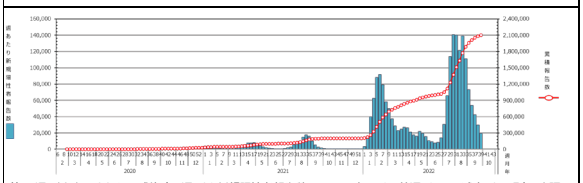
第39週の順位	第38週の順位	感染症	2022年第39週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第39週の定点あたり報告数	2022年第39週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	2.08	10%増	1.54	1歳_36%
2	2	感染性胃腸炎	1.80	4%増	2.40	1歳_16%
3	3	RSウイルス感染症	0.83	20%減	0.25	1歳未満_30%
4	4	ヘルパンギーナ	0.55	27%増	0.60	1歳_33%
5	5	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.36	9%増	0.41	8歳_17%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	63%減	0.00	1歳,5歳,9歳_33%

第39週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第39週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は19,613名であり、前週より34%減少した。現在、大阪モデルは警戒信号（黄）である。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第39週9月26日～10月2日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>［週報］> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5		1	1	1				2		146
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	5		1	1	1	1			1		85
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	1		1	1						106
	後天性免疫不全症候群	2								2		72
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1							1			9
	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1		69
	梅毒	18	2	1		2				13		1268
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	19,613	2020年1月以降累計　2,100,780									
結核（2022年8月分）	結核　新登録患者数：58名（内　肺・喀痰塗抹陽性　17名）（府内累積報告数　642名、内　肺・喀痰塗抹陽性　232名）											

（2022年10月4日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第40週（10月3日～10月9日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加」

第40週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,154例であり、前週比3.4%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナ、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ12.05、1.92、0.70、0.47、0.43である。

手足口病は前週比1%減の401例で、三島3.53、南河内3.44、堺市2.58、大阪市南部2.56、北河内2.40であった。

感染性胃腸炎は7%増の376例で、南河内2.94、大阪市南部2.83、中河内2.70である。

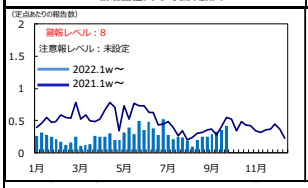
RSウイルス感染症は15%減の137例で、南河内2.75、堺市1.26、泉州1.00であった。

ヘルパンギーナは13%減の93例で、大阪市南部1.11、三島0.71、豊能0.52である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は18%増の84例で、泉州1.05、大阪市南部0.89、中河内0.75であった。

インフルエンザは増減なしの3例で、定点あたり報告数は0.01である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎



手足口病

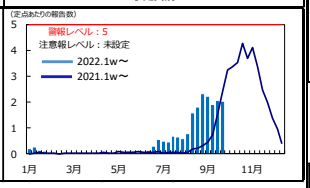


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第40週10月3日～10月9日）

第40週の順位	第39週の順位	感染症	2022年第40週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第40週の定点あたり報告数	2022年第40週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	2.05	1%減	2.42	１歳_36%
2	2	感染性胃腸炎	1.92	7%増	2.57	１歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.70	15%減	0.23	１歳_29%
4	4	ヘルパンギーナ	0.47	13%減	0.75	２歳_23%
5	5	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.43	18%増	0.55	３歳_19%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.01	増減なし	0.00	１歳_67%

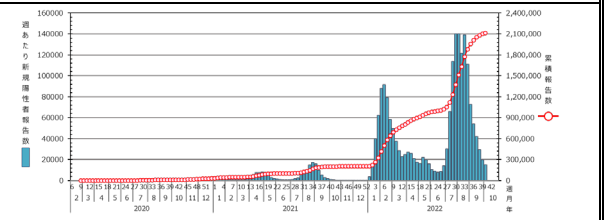
第40週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症



第40週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は15,077名であり、前週より23%減少した。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。

新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)
新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第40週10月3日～10月9日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			1	1	1					149
４類感染症	デング熱	1							1			10
	レジオネラ症（肺炎型）	1				1						86
５類感染症	クロイツフェルト・ヤコブ病	1					1					14
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1						27
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1		10
	侵襲性肺炎球菌感染症	1					1					70
	梅毒	13	2	1	2				1	7		1288
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	15,077	2020年1月以降累計　2,115,857									
結核（2022年8月分）	結核　新登録患者数：58名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　17名）（府内累積報告数　642名、内　肺・喀痰塗抹陽性　232名）										

（2022年10月11日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第41週（10月10日～10月16日）

今週のコメント

～A群溶血性レンサ球菌咽頭炎～　手洗い、うがいが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎　増加続く」

第41週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,073例であり、前週比7.0%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.91、1.66、0.56、0.55、0.37である。

手足口病は前週比7%減の374例で、南河内3.75、中河内2.90、大阪市南部2.83、三島2.71、堺市1.95であった。

感染性胃腸炎は13%減の326例で、中河内2.75、南河内2.38、大阪市南部2.22である。

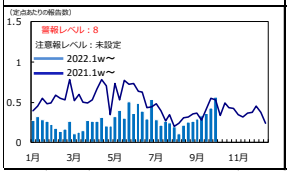
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は31%増の110例で、大阪市南部1.94、泉州1.53、豊能0.70であった。

RSウイルス感染症は21%減の108例で、南河内3.00、堺市0.79、大阪市北部0.64である。

ヘルパンギーナは23%減の72例で、大阪市北部0.86、大阪市西部0.80、三島0.65であった。

インフルエンザは14例で、定点あたり報告数は0.05である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎



手足口病

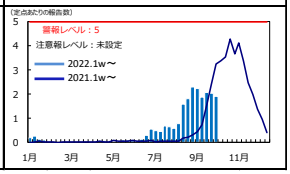


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第41週10月10日～10月16日）

第41週の順位	第40週の順位	感染症	2022年第41週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第41週の定点あたり報告数	2022年第41週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	1.91	7%減	3.21	１歳_38%
2	2	感染性胃腸炎	1.66	13%減	2.66	１歳_20%
3	5	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.56	31%増	0.53	10-14歳_20%
4	3	RSウイルス感染症	0.55	21%減	0.20	１歳未満_36%
5	4	ヘルパンギーナ	0.37	23%減	1.07	１歳_29%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.05	367%増	0.00	20歳以上_36%

第41週のコメント

～梅毒～　大阪府における2022年の梅毒累計報告数は、現行の集計方法で過去最高となった。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。2022年第41週時点で大阪府では1,337例と、現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった2018年の1,188 例を超えた。

梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒(大阪府感染症情報センター)
梅毒(大阪健康安全基盤研究所)
梅毒とは(国立感染症研究所)

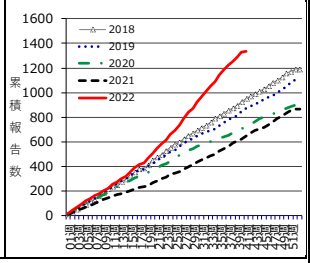


表２．大阪府全数報告数（2022年 第41週10月10日～10月16日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患 をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2								2		152
４類感染症	日本紅斑熱	1							1			8
	レジオネラ症（肺炎型）	4		1			1			2		92
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1								1		
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2					2					111
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1		1								15
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1		1								29
	後天性免疫不全症候群	1								1		75
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1			1							11
	侵襲性肺炎球菌感染症	1					1					73
	梅毒	9	1			1				7		1,337
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	16,105	2020年1月以降累計　2,131,962									
結核（2022年8月分）	結核　新登録患者数：58名	（内　肺・喀痰塗抹陽性　17名）（府内累積報告数　642名、内　肺・喀痰塗抹陽性　232名）										

（2022年10月18日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第42週（10月17日～10月23日）

今週のコメント

～ヘルパンギーナ～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ　増加」

第42週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,136例であり、前週比5.9%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.04、1.71、0.60、0.55、0.39である。

感染性胃腸炎は前週比23%増の400例で、中河内3.40、南河内3.25、大阪市西部3.20、豊能2.65、堺市・大阪市南部2.00であった。

手足口病は10%減の336例で、南河内3.00、中河内2.40、三島2.35である。

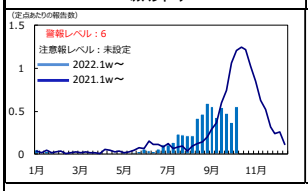
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%増の117例で、泉州1.89、大阪市南部1.44、中河内1.15であった。

ヘルパンギーナは50%増の108例で、北河内1.04、南河内0.69、大阪市南部0.67である。

RSウイルス感染症は29%減の77例で、南河内1.81、泉州0.74、北河内0.44であった。

インフルエンザは9例増の23例で、定点あたり報告数は0.08である。

ヘルパンギーナ



感染性胃腸炎

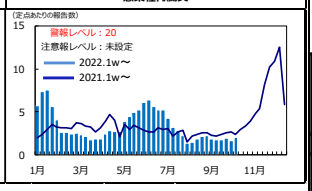


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第42週10月17日～10月23日）

第42週の順位	第41週の順位	感染症	2022年第42週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第42週の定点あたり報告数	2022年第42週の年齢別患者発生数最大割合値
1	2	感染性胃腸炎	2.04	23%増	2.34	１歳_16%
2	1	手足口病	1.71	10%減	3.36	１歳_44%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.60	6%増	0.34	10-14歳_18%
4	5	ヘルパンギーナ	0.55	50%増	1.20	１歳_42%
5	4	RSウイルス感染症	0.39	29%減	0.13	１歳未満_31%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.08	64%増	0.00	15-19歳_39%

第42週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌感染症（大阪健康安全基盤研究所）

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

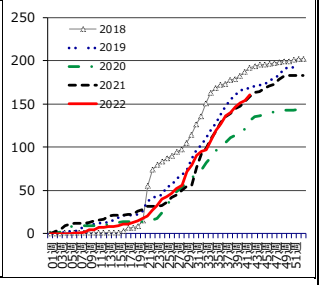


表２．大阪府全数報告数（2022年 第42週10月17日～10月23日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6					5			1	160
４類感染症	デング熱	1							1		11
	レジオネラ症(肺炎型)	2	2								95
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	5	1			1				3	118
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1	30
	梅毒	14	1			3	1		1	8	1,366
	百日咳	2			1				1		23
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	16,453	2020年1月以降累計　2,148,415								
結核（2022年8月分）	結核　新登録患者数：58名（内　肺・喀痰塗抹陽性　17名）（府内累積報告数　642名、内　肺・喀痰塗抹陽性　232名）										

（2022年10月25日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）

2022年 第44週（10月31日～11月6日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　増加」

第43週と第44週をあわせて報告する。

第43週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は984例であり、前週比13.4%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.98、1.28、0.60、0.47、0.28である。

第44週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,009例であり、前週比2.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.15、1.24、0.54、0.46、0.29である。

感染性胃腸炎は前週比9%増の422例で、中河内4.00、大阪市西部2.60、南河内2.31、大阪市南部2.28、三島2.24であった。

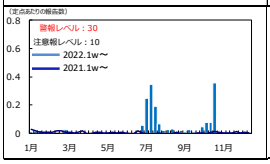
手足口病は3%減の244例で、南河内2.69、堺市1.68、豊能1.39である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の106例で、泉州1.84、中河内1.15、大阪市南部0.61であった。

ヘルパンギーナは2%減の91例で、北河内1.00、南河内0.69、泉州0.68である。

インフルエンザは346%増の107例、定点あたり報告数は0.36であり、堺市0.97、大阪市南部0.67、大阪市西部0.47であった。

インフルエンザ



感染性胃腸炎

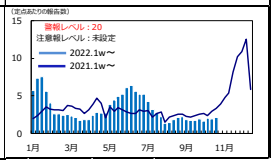


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第44週10月31日～11月6日）

第44週の順位	第43週の順位	感染症	2022年第44週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第44週の定点あたり報告数	2022年第44週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.15	9%増	3.29	１歳_15%
2	2	手足口病	1.24	3%減	4.27	１歳_42%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.54	9%減	0.43	４歳、10-14歳_13%
4	4	ヘルパンギーナ	0.46	2%減	1.22	２歳_27%
5	6	突発性発しん	0.29	47%増	0.37	１歳_73%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.36	346%増	0.01	20歳以上_21%

第44週のコメント

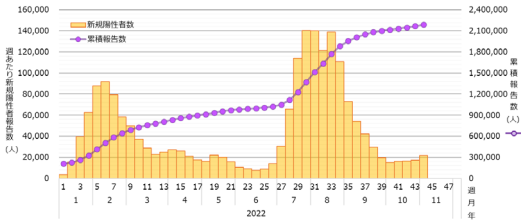
～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

第44週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は21,860名であり、前週より27%増加した。大阪モデルは、11月8日に警戒解除（緑）から警戒信号（黄）に移行した。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。



新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第44週10月31日～11月6日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2							1	1	166
５類感染症	アメーバ赤痢	1	1								35
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	1						2		130
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1							1		31
	侵襲性肺炎球菌感染症	4	1	1			1		1		81
	梅毒	13	1		1	1	1		1	8	1,455
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	21,860	2020年1月以降累計　2,187,515								
結核（2022年9月分）	結核　新登録患者数：56名（内　肺・喀痰塗抹陽性　31名）（府内累積報告数　806名、内　肺・喀痰塗抹陽性　308名）										

（2022年11月8日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第45週（11月7日～11月13日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ増加続く」

第45週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は前週比8例減の1,001例であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 2.32、1.09、0.47、0.41、0.28である。

感染性胃腸炎は前週比 8%増の455例で、南河内3.88、大阪市南部3.28、中河内3.20、堺市2.58、大阪市北部2.43であった。

手足口病は 12%減の214例で、北河内1.84、南河内1.81、堺市1.63である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は 12%減の93例で、中河内1.20、泉州0.74、南河内0.69であった。

ヘルパンギーナは 11%減の81例で、大阪市東部1.00、泉州0.95、大阪市西部・大阪市南部0.50である。

RSウイルス感染症は 29%増の54例で、南河内1.19、堺市0.58、大阪市北部0.57であった。

インフルエンザは36%増の145例で定点あたり報告数は0.48である。大阪市南部1.26、大阪市北部0.85、堺市0.76であった。

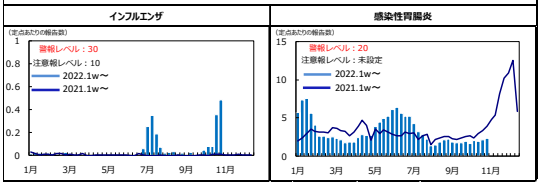


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第45週11月7日～11月13日）

第45週の順位	第44週の順位	感染症	2022年第45週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第45週の定点あたり報告数	2022年第45週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.32	8%増	3.90	1歳_15%
2	2	手足口病	1.09	12%減	3.60	1歳_36%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.47	12%減	0.42	3歳_16%
4	4	ヘルパンギーナ	0.41	11%減	0.99	1歳_27%
5	6	RSウイルス感染症	0.28	29%増	0.11	1歳_26%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.48	36%増	0.01	20歳以上_17%

第45週のコメント

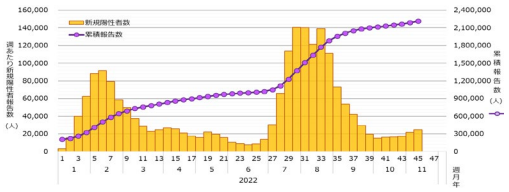
～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

第45週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は24,660名であり、前週より13%増加した。大阪モデルは、11月8日に警戒解除（緑）から警戒信号（黄）に移行した。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。



新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第45週11月7日～11月13日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	1						1		168
４類感染症	デング熱	1								1	13
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2		1			1				136
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1						1			32
	侵襲性肺炎球菌感染症	1							1		83
	梅毒	23		1	3	2	3			14	1,487
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	24,660	2020年1月以降累計　2,212,175								
結核（2022年9月分）	結核　新登録患者数：56名（内　肺・喀痰塗抹陽性　31名）（府内累積報告数　806名、内　肺・喀痰塗抹陽性　308名）										

（2022年11月15日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2022年 第46週（11月14日～11月20日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　今後の動向に注意」

第46週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,086例であり、前週比8.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、ヘルパンギーナ、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.91、0.96、0.43、0.42、0.24である。

感染性胃腸炎は前週比25%増の571例で、大阪市西部6.00、南河内4.75、豊能3.48、中河内3.20、泉州2.89であった。

手足口病は12%減の188例で、南河内2.63、大阪市南部1.28、堺市1.21である。

ヘルパンギーナは5%増の85例で、大阪市東部1.00、泉州0.95、南河内0.75であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%減の83例で、中河内1.50、泉州0.95、大阪市南部0.67である。

インフルエンザは6%増の154例で、定点あたり報告数は0.51であった。大阪市北部1.95、大阪市西部0.80、泉州0.63である。

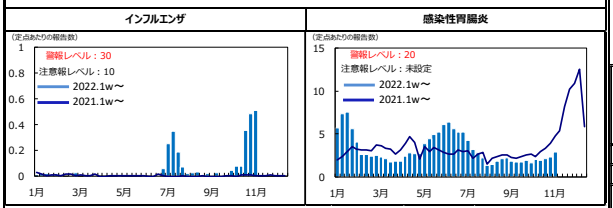


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第46週11月14日～11月20日）

第46週の順位	第45週の順位	感染症	2022年第46週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第46週の定点あたり報告数	2022年第46週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.91	25%増	4.67	1歳_15%
2	2	手足口病	0.96	12%減	4.07	1歳_42%
3	4	ヘルパンギーナ	0.43	5%増	0.85	1歳,2歳_24%
4	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.42	11%減	0.34	4歳,6歳_17%
5	6	突発性発しん	0.24	6%減	0.28	1歳_49%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.51	6%増	0.00	20歳以上_24%

第46週のコメント

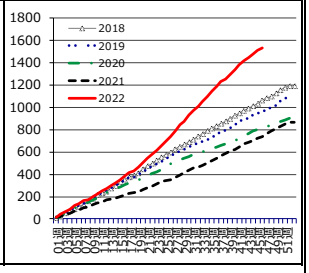
～梅毒～

大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。2022年第46週時点で大阪府では1,531例と、現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった2018年の1,188 例を超えた。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。



梅毒について（大阪健康安全基盤研究所）

梅毒とは(国立感染症研究所)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第46週11月14日～11月20日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3					1		1	1	169
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	102
５類感染症	ウイルス性肝炎	1								1	8
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				33
	侵襲性肺炎球菌感染症	5	1				1			3	89
	梅毒	24			1	1	1		3	18	1,531
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	27,532	2020年1月以降累計　2,239,707								
結核（2022年9月分）	結核　新登録患者数：56名（内　肺・喀痰塗抹陽性　31名）（府内累積報告数　806名、内　肺・喀痰塗抹陽性　308名）										

（2022年11月22日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第47週（11月21日～11月27日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　ほぼ横ばい」

第47週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,067例であり、前週比1.7%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.99、0.87、0.45、0.37、0.24である。

感染性胃腸炎は前週比3%増の587例で、大阪市南部4.89、大阪市西部4.10、堺市3.79、南河内3.69、中河内3.20であった。

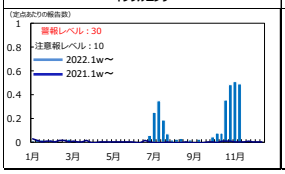
手足口病は10%減の170例で、中河内1.55、南河内1.38、堺市1.37である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%増の89例で、中河内1.75、大阪市南部1.33、大阪市西部0.70であった。

ヘルパンギーナは15%減の72例で、大阪市南部0.72、泉州0.63、大阪市東部0.53である。

インフルエンザは4%減の148例で、定点あたり報告数は0.49であった。大阪市北部1.55、堺市0.69、北河内0.68である。

インフルエンザ



感染性胃腸炎

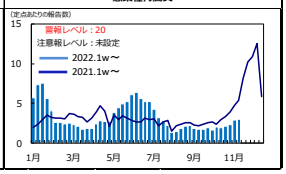


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第47週11月21日～11月27日）

第47週の順位	第46週の順位	感染症	2022年第47週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第47週の定点あたり報告数	2022年第47週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.99	3%増	5.36	2歳_14%
2	2	手足口病	0.87	10%減	3.37	1歳_39%
3	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.45	7%増	0.31	6歳,10-14歳_13%
4	3	ヘルパンギーナ	0.37	15%減	0.62	2歳_29%
5	5	突発性発しん	0.24	増減なし	0.30	1歳_68%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.49	4%減	0.00	20歳以上_20%

第47週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉･食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌（大阪健康安全基盤研究所）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

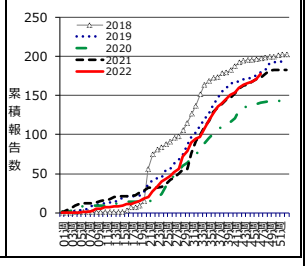


表２．大阪府全数報告数（2022年 第47週11月21日～11月27日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7							1	6	178
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2			1		1				104
5類感染症	ウイルス性肝炎	2			1					1	10
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1		1							138
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3	1			1	1				36
	後天性免疫不全症候群	3								3	85
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2							1	1	14
	侵襲性肺炎球菌感染症	1							1		91
	水痘（入院例）	3		1						2	16
	梅毒	15	1		1				1	12	1,553
	播種性クリプトコックス症	1								1	5
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	33,485	2020年1月以降累計　2,273,192								
結核（2022年9月分）	結核　新登録患者数：56名（内　肺･喀痰塗抹陽性　31名）（府内累積報告数　806名、内　肺･喀痰塗抹陽性　308名）										

（2022年11月29日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第48週（11月28日～12月4日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　増加」

第48週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,115例であり、前週比4.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、ヘルパンギーナ、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.32、0.84、0.41、0.35、0.27である。

感染性胃腸炎は前週比11%増の651例で、大阪市西部8.50、南河内4.75、中河内4.60、豊能3.96、大阪市南部3.39であった。

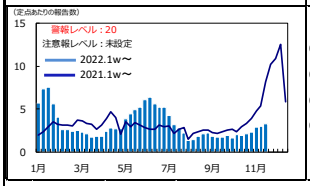
手足口病は4%減の164例で、堺市1.47、大阪市南部1.28、北河内1.20である。

ヘルパンギーナは13%増の81例で、大阪市東部1.33、北河内0.76、大阪市西部0.70であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は22%減の69例で、中河内0.90、大阪市南部0.89、泉州0.47である。

インフルエンザは25%減の111例で、定点あたり報告数は0.37であった。大阪市北部0.85、泉州0.63、北河内0.60である。

感染性胃腸炎



インフルエンザ

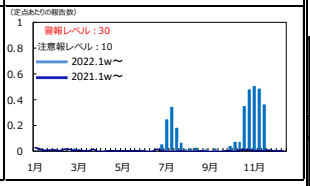


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2022年 第48週11月28日～12月4日）

第48週の順位	第47週の順位	感染症	2022年第48週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第48週の定点あたり報告数	2022年第48週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	3.32	11%増	8.10	1歳_16%
2	2	手足口病	0.84	4%減	2.47	1歳_34%
3	4	ヘルパンギーナ	0.41	13%増	0.52	2歳_31%
4	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.35	22%減	0.36	3歳,４歳,５歳_14%
5	5	突発性発しん	0.27	11%増	0.26	1歳_67%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.37	25%減	0.00	10-14歳_24%

第48週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期より多く、全国でも2020年5,784例、2021年7,873例と増加している

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の報告数は、2020年5,784例、2021年は過去最高の7,873例と増加している。2022年第48週時点で大阪府では1,640例と、現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった2018年の1,188 例を超えている。梅毒は、性行為･オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒（大阪府感染症情報センター）
梅毒とは(国立感染症研究所)

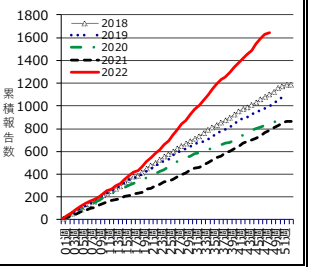


表２．大阪府全数報告数（2022年 第48週11月28日～12月4日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3		1		2					181
5類感染症	アメーバ赤痢	1		1							40
	ウイルス性肝炎	1		1							12
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	2		1						143
	クロイツフェルト･ヤコブ病	1			1						17
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2		1						1	39
	後天性免疫不全症候群	1								1	86
	侵襲性肺炎球菌感染症	5	2				1		1	1	96
	梅毒	14			2	1	1		1	9	1,640
	百日咳	2			1					1	29
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	36,649	2020年1月以降累計　2,309,841								
結核（2022年10月分）	結核　新登録患者数：47名（内　肺･喀痰塗抹陽性　24名）（府内累積報告数　859名、内　肺･喀痰塗抹陽性　331名）										

（2022年12月6日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第49週（12月5日～12月11日）

今週のコメント

～感染性胃腸炎～　手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎　さらに増加」

第49週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,208例であり、前週比8.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.69、0.92、0.42、0.41、0.26である。

感染性胃腸炎は前週比11%増の724例で、大阪市西部7.90、南河内4.94、豊能4.61、中河内4.20、大阪市南部3.67であった。

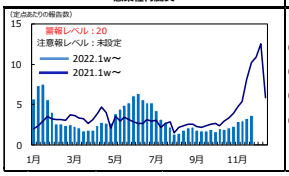
手足口病は10%増の181例で、南河内2.44、北河内1.76、中河内1.10である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%増の82例で、中河内1.05、大阪市南部0.78、泉州0.68であった。

ヘルパンギーナは1%減の80例で、北河内0.84、泉州0.58、大阪市南部0.50である。

インフルエンザは75%増の194例で、定点あたり報告数は0.65であった。大阪市北部1.80、堺市1.38の2ブロックで流行開始の目安である１を超えている。

感染性胃腸炎



インフルエンザ

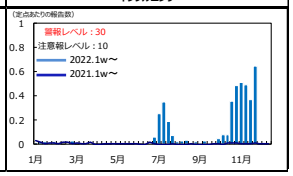


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第49週12月5日～12月11日）

第49週の順位	第48週の順位	感染症	2022年第49週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第49週の定点あたり報告数	2022年第49週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	3.69	11%増	10.15	2歳_16%
2	2	手足口病	0.92	10%増	1.98	1歳_33%
3	4	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.42	19%増	0.38	10-14歳_16%
4	3	ヘルパンギーナ	0.41	1%減	0.31	1歳_25%
5	5	突発性発しん	0.26	4%減	0.25	1歳_56%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.65	75%増	0.01	10-14歳_20%

第49週のコメント

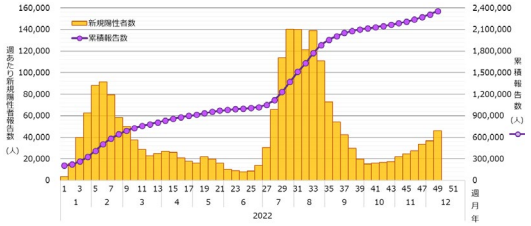
～新型コロナウイルス感染症～

基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

第49週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は46,032名であり、前週より26%増加した。大阪モデルは、11月8日に警戒解除（緑）から警戒信号（黄）に移行した。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。



新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2022年 第49週12月5日～12月11日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1				1					182
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1				1					107
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1		1							148
	侵襲性肺炎球菌感染症	3		1		1				1	100
	梅毒	14		1	1				1	11	1,664
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	46,032	2020年1月以降累計　2,355,873								
結核（2022年10月分）	結核　新登録患者数：47名（内　肺・喀痰塗抹陽性　24名）（府内累積報告数　859名、内　肺・喀痰塗抹陽性　331名）										

（2022年12月13日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2022年 第50週（12月12日～12月18日）

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、身体的距離の確保、密閉・密集・密接の回避が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎とインフルエンザ 増加続く」

第50週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,205例であり、前週比0.2%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.14、0.62、0.38、0.33、0.19である。

感染性胃腸炎は前週比12%増の812例で、大阪市西部5.90、大阪市南部5.50、南河内5.38、豊能4.96、堺市4.37であった。

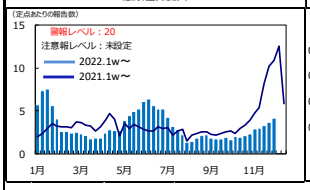
手足口病は33%減の122例で、南河内2.06、堺市1.00、北河内0.92である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%減の74例で、中河内0.80、大阪市南部0.67、泉州0.47であった。

ヘルパンギーナは20%減の64例で、泉州0.79、大阪市東部0.67、北河内0.64である。

インフルエンザは26%増の245例で、定点あたり報告数は0.82であった。堺市2.59、大阪市北部1.10、大阪市西部0.93である。

感染性胃腸炎



インフルエンザ

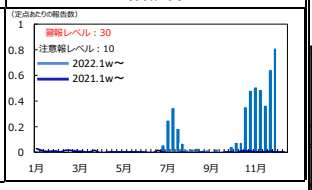


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第50週12月12日～12月18日）

第50週の順位	第49週の順位	感染症	2022年第50週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第50週の定点あたり報告数	2022年第50週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.14	12%増	10.70	1歳_15%
2	2	手足口病	0.62	33%減	1.38	1歳,2歳_32%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.38	10%減	0.44	3歳_16%
4	4	ヘルパンギーナ	0.33	20%減	0.24	2歳_28%
5	5	突発性発しん	0.19	26%減	0.25	1歳_49%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.82	26%増	0.00	10-14歳_21%

第50週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌感染症（大阪健康安全基盤研究所）

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

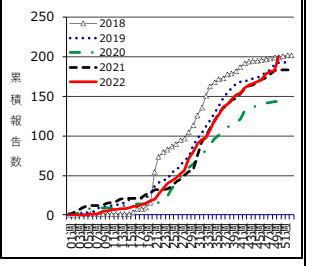


表２．大阪府全数報告数（2022年 第50週12月12日～12月18日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	18			2	2				14	200
４類感染症	デング熱	1								1	14
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	108
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1	1	1					151
	後天性免疫不全症候群	1								1	89
	侵襲性肺炎球菌感染症	1					1				102
	水痘（入院例）	1								1	17
	梅毒	16	1		1					14	1,692
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	59,451	2020年1月以降累計　2,415,324								
結核（2022年10月分）	結核　新登録患者数：47名（内　肺・喀痰塗抹陽性　24名）（府内累積報告数　859名、内　肺・喀痰塗抹陽性　331名）										

（2022年12月20日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2022年 第51週（12月19日～12月25日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　流行期入り」

第51週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,287例であり、前週比6.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.82、0.44、0.34、0.27、0.19である。

感染性胃腸炎は前週比16%増の944例で、南河内6.00、大阪市西部5.90、中河内5.85、泉州5.74、堺市5.26であった。

手足口病は30%減の86例で、南河内1.75、堺市0.74、北河内0.68である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%減の66例で、中河内0.80、大阪市南部0.78、北河内0.44であった。

ヘルパンギーナは17%減の53例で、大阪市北部0.86、北河内0.56、泉州0.47である。

インフルエンザは171%増の664例で、定点あたり報告数は2.21であった。大阪市東部4.23、堺市4.07、大阪市北部3.30、中河内2.13、北河内2.10である。

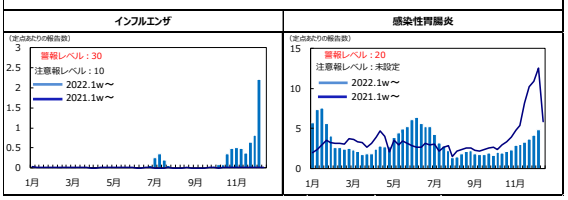


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2022年 第51週12月19日～12月25日）

第51週の順位	第50週の順位	感染症	2022年第51週の定点あたり報告数	前週比増減	2021年第51週の定点あたり報告数	2022年第51週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.82	16%増	12.07	2歳_16%
2	2	手足口病	0.44	30%減	0.94	1歳_37%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.34	11%減	0.38	2歳,5歳_17%
4	4	ヘルパンギーナ	0.27	17%減	0.25	1歳_40%
5	5	突発性発しん	0.19	3%増	0.26	1歳_55%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	2.21	171%増	0.01	10-14歳_18%

第51週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

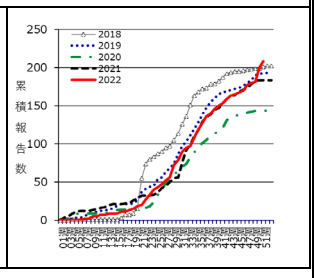


表２．大阪府全数報告数（2022年 第51週12月19日～12月25日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	8				1	1		1	5	209
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1	1								109
５類感染症	アメーバ赤痢	1		1							43
	ウイルス性肝炎	1	1								13
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1	1	1					155
	急性脳炎	1		1							15
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					40
	梅毒	23	3			4			1	15	1,723
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	69,661	2020年1月以降累計　2,484,985								
結核（2022年11月分）	結核　新登録患者数：88名（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,024名、内　肺・喀痰塗抹陽性　400名）										

（2022年12月27日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2022（令和4）年 第52週～2023（令和5）年 第1週（12月26日～1月8日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　注意報レベル迫る」

2022年第52週と2023年第1週をあわせて報告する。年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。第52週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は830例であり、前週比35.5%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、突発性発しん、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.15、0.25、0.24、0.17、0.14である。

2023年第1週の報告数の総計は720例であり、前週比13.3%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、突発性発しん、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.86、0.16、0.14、0.13、0.11である。

インフルエンザは、第52週が61%増の1,066例で、定点あたり報告数は３.57であった。第1週は112%増の2,256例で、定点あたり報告数は7.57である。大阪市西部20.80、南河内13.29、泉州12.22であった。

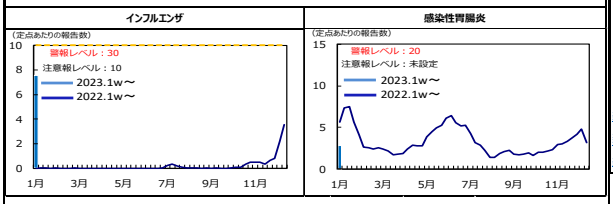


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2023年 第1週1月2日～1月8日）

第1週の順位	第52週の順位	感染症	2023年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2022年第1週の定点あたり報告数	2023年第1週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.86	10%減	5.66	1歳_18%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.16	33%減	0.27	10-14歳_22%
3	3	手足口病	0.14	40%減	0.19	1歳未満,1歳,3歳_21%
4	4	突発性発しん	0.13	24%減	0.24	1歳_68%
5	5	RSウイルス感染症	0.11	19%減	0.31	1歳_41%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	7.57	112%増	0.01	20歳以上_32%

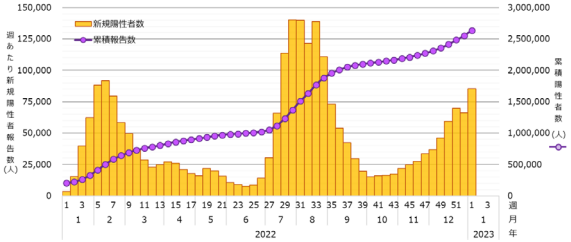
第1週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　基本的な予防の徹底を（マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避）

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

第1週の新型コロナウイルス感染症の週あたり新規陽性者報告数は85,157名であり、前週より28%増加した。大阪モデルは、12月26日に警戒信号（黄）から非常事態（赤）に移行した。新型コロナウイルス感染症の主な感染経路は飛沫・エアロゾル・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の肺炎症状が現れる。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、ワクチン接種、マスク着用、身体的距離の確保、手洗いの徹底、密閉・密集・密接の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、隔離、接触者調査が重要である。



新型コロナウイルス(COVID-19)関連情報(国立感染症研究所)　新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)について(大阪健康安全基盤研究所)

新型コロナウイルス感染症関連特設サイト(大阪府)

表２．大阪府全数報告数（2023年 第1週1月2日～1月8日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸チフス	1	1								1
４類感染症	デング熱	1							1		1
	レジオネラ症（肺炎型）	2			2						2
５類感染症	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1	1
	梅毒	4					1			3	4
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1							1		1
新型インフルエンザ等感染症	新型コロナウイルス感染症	79,496	2020年1月以降累計　2,630,793								
結核（2022年11月分）	結核　新登録患者数：88名（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　1,024名、内　肺・喀痰塗抹陽性　400名）										

（2023年1月10日　集計分）